
ぬくもりあれば

ひとひと

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ぬくもりあれば

【コード】

N5778E

【作者名】

ひとひと

【あらすじ】

大学に入ってから友達が一人もできない主人公が、ある日、川の土手で家出少女と出会う。彼女を助けるためにあれやこれやとするのだが……。

第一話（前書き）

冒頭では、描写や主人公の独白が多くて少し読みづらい点もあるかもしれませんが、さらっと軽く読んでいただければと思います。
第二話以降から比較的読みやすくなっているかと思えます。

ぬくもりあれば

第一話

外に出ると、まぶしかった太陽がすっかり雲に隠れて、輝きはなく、雨模様を窺わせる灰色の空が広がっていた。異様に暗くなった校内を福田君と歩き、これから授業を受けるんだろう、学生でぞろぞろとなだれ込む校門をなんとか切り抜けて、大学を後にした。

成り行きで福田君の住むアパートへ初めて行くことになった俺は、今にも降り出しそうな空を見上げては顔を横に向け、彼との会話を楽しんだ。でも、時折進んでいく方向から吹いてくる冷たい風が頬をすりぬけた。季節はまだ秋だと言うのに、もう冬を思わせるほどに空気は冷えている。俺は身震いしながら、彼の話に大袈裟に相槌を打つ。

差し掛かった橋を、渡らずに右に曲がり、砂利道を通った。傾斜になっっている芝生を挟んで、下のほうにある川岸の土手には二つの大きな岩の間に平らな板を置いたようなベンチが所々あり、そこに座っている人、中には絵を描いていたり、タオルを顔全体に覆いながら寝そべっている人などがけっこういた。けれど夜になると、この辺は一気にアベックで埋め尽されてしまい、一人ではとても近寄りづらい場所と化してしまうのだ。

どこの学校のクラブかはわからないが、野球のユニフォームを着た若者たちが二列に並んで掛け声を上げながら俺たちと反対の方向に走っていった。この土手は結構広いため、ジョギングや散歩のコースに不自由することがなく、気軽に利用できる。

そんな様子を上のほうから見下ろしていると、なんとなく気持ちがいいのはなぜだろうか。優越感とかそんなもんじゃなくなってる……。

例えば、俺の視界に映る制服姿の一人の少女が、ベンチに座って川をじっと眺めているその後ろ姿を見ていると、自分とは何か？と考えていそうなその光景が、俺にとっては何だか微笑ましく感じ

てしまうんだ。今、へらへらと笑いながら俺らの横を通り過ぎた、どぎつい化粧をした少女どもとはわけが違う。化粧をするのはあんならの勝手だが、それよりも心の化粧をしなさい。そうするだけでも日本はだいぶよくなるでしょう 多分。

次の橋を渡り、街路樹のそばを通ると、鮮やかな紅葉が目に入ってきた。まるで葉が燃え盛る炎のように美しい色を見せている。その幻想的な雰囲気に見とれながら歩いていると、気持ちがいいし、体や心も癒してくれる。

ここの街路樹では、多少の雨や雪を受け止め、夏になれば日射や熱射から歩行者を守っているんだろう。なおかつこつこつとした爽やかな環境は、車で通るドライバーの心理にも良い影響を及ぼしているはずだ。こんな、素晴らしい散歩コースがあったとは。もっとこの街も散策しないといけないなあ。

「着いたで」

福田君が言った。

見たたえのあった街路樹から狭い道に入り、少し進んだところで足を止めた。彼が指差すほうに目を向けると、きれいな、けっこう大きな家だった。へえー、ここで住んでるんだ。

「かなり近いんだね」

「何言つてんねん。お前も近いやんか」

「でも俺は、東京から京都に来て、一人暮らしだから」

「そやなあ。まっ、入れや」

俺は福田君の後につき、家の中に入った。中はしーんとしていて、俺たちの足音だけが響く。ここの家族はどうやら外出中らしい。

突き当たりの階段を上り、案内されるがまま福田君の部屋を目指す。緊張してきた。俺はこの人とうまくやっていけるんだろうか。

部屋に入る、が、まず目に飛び込んできた光景に、驚いてしまった。狭い部屋の中に無造作に週刊誌やらが投げ散らかされており、灰皿の代わりの空き缶が所狭しと並べられていた。まるできれいだつた部屋をサイコロのごとく転がした後のようだ。

思わず「うわー、汚い」と呟きそうになったが、なんとかそれを堪え、顔もなんとか頬を弛めることに努めた。嫌われたらおしまいだ。せつかく友達になれるかもしれないのに……。

「悪いなあ、こんな部屋で。掃除しようとは思ってるんやけど、なんかめんどーやねん」

手を頭に添えて、ハハハと笑う。

「いや、別に、大丈夫」

福田君は簡単にその辺のものを片付けて、座れるスペースを作ると、まあここにも座つといて、と言った。

胡坐をかいて座るのがやつとで、横に置いてあつた名前の聞いたこともないロックバンドの楽譜を手に取り、ペラペラとめくった。サークルでバンドを組んでいるという福田君は、ギターを手に、この楽譜を見たりしながら曲の練習をしているんだろう。週刊誌のほとんどは、音楽関係のものばかりだ。

「おつ、こんなところにお菓子発見！」

福田君は勉強机の上に置かれていたお菓子を取り上げ、俺に手渡した。ポテトチップスの袋、しかも食べかけ。

「あー、これはちよつと……」

「大丈夫やつて。それ、昨日俺が食つてたやつやから。全部食べてもええで」

「は、はあ」と当惑しながらも、チップスを一枚つまんで、口に含んだ。つて、やっぱり湿気てるよこれ。いや、我慢、我慢だ。

「いやー、ほんまにスマンかったなあ。まだ授業で何回か喋つただけやのに、暇だから家に来 へんかって誘つちやつて」

「いやいや、そんなあ」誘つてくれてほんとに有難かつたんだよ。

福田君は煙草を吸い始めた。俺は言おうとしていた言葉が口からなかなか出てこない。煙草をくわえている姿をもどかしそうに見つめながら、彼の言葉を待った。

「なあ、サークルとか入ってんの？」

「えっ？」

なぜかどきつとした。

「い、いや、何も入って、ないけど」

今思えば、入学式の直後にあったオリエンテーション中にどこかのサークルに入っていたいればよかった、とすぐ後悔している。今から入部しても遅くはないんだけど、他の奴らに先を越されたみたいで何だか入りにくい状態だ。

「ふーん、そうなん」

福田君は視線を、俺から窓のほうに移した。

話が途切れてしまった。やばい。何か話題を見つけないと……。

すると福田君は、机の椅子にかけてあったギターを手に持ち、いきなり弾きながら歌い始めた。

どんなに つらい人生でも

君といるだけで 僕は幸せさ

二人で一緒に あの空を見よう

だって僕は 君が好きだから

聴き覚えのない、いや、絶対に聴いたことのない歌だ。

「これって、何の曲？」

俺は言った。福田君は手を止める。

「オレが作った曲」

照れくさそうに言う。どおりで。月並みの歌詞というよりも内容が不可解だし、リズムも良くない曲だとは思ったけど、俺は「良い曲だね」とおだてた。

「はんまに？ サンキュー！ じゃあ、もう一曲披露しよう」

僕は どんなに君のことが好きか

でも 君はアイツが好きだ

僕は誓う アイツよりも良い男だと

そして 僕はアイツをやっつけるのさ……

もう一曲と言っておきながら、結局福田君は合計七曲を俺の前で楽しそうに歌った。声は良い声してるし、音量もあって上手いのに、ギターと歌詞だけは才能がないようだ。心の底からかわいそうに思

う。

でも、俺は大袈裟に拍手する。

「うわ、こんなに喜んでもらったのは初めてや。サークルでも、あまり評判よくないから、誰かのカヴァー曲ばっかやってるんやけど……オレって、やっぱりミュージシャンの才能あんのかなあ」

「素質はあると思うよ。だから、がんばって」

苦笑交じりに励ました。内心は、もちろんそうは思わない。

「ところでさあ」福田君はまた俺を向いた。「実はオレさあ……」

「何？」

「彼女できてん」

「はあ？」思わず呆気にとられた。

「まあ、とりあえず聞いてくれよ」

福田君は勝手に自分の話を始めていった。五日前の夜、同じ学科の女の子の家まで直接行って告白し、とりあえずデートの約束をとりにつけることに成功。そして数日後、まず初めに近くにある喫茶店に行ったという話の途中で、そろそろ帰る、と言った。

「えっ、まだ早いやん」

俺は窓に目をやった。

「どっちみち雨も降りそうだし」

「ま、そやな。じゃあ、続きは授業の合間でもまた。そんじゃあ」

そう言って福田君は、ギターをまた弾き始めた。

俺は「今日はありがとう」とだけ言って部屋を出て、逃げるように階段を降りて家を飛び出した。

ぬくもりあれば

東京から離れて、京都で一人暮らしを始めてから、かれこれ半年ぐらいが経つ。今通っている大学は、実家からかなり離れてはいるけれど、情報収集をしているうちに自分にはぴったりだと思えてきたから選んだ。国立大学ゆえにレベルも高く、模擬試験における自分の偏差値では到底及ばなかった。しかし、こつこつと勉強をし続けたことが実って、受験は見事に合格し、大学近くのアパートで一

人暮らしすることも両親に許してもらった。

これで心置きなく学校に通える。楽しい大学生活を過ごせる。

ここまでではよかった。いや、ここまでがよすぎたからこそ苦悩の色が濃いのかも知れない。

俺は、大学に入ってから友達はまだ一人もいない。

俺は俺なりの努力で、人と接することに努めてきたのだが、ダメだった。高校までは、いつの間にか友達ができていたということが多く、みんな仲のいい奴ばかりだった。

なのに、なぜ？

いや、俺なりに努力したといつても、まずは相手のほうから声をかけてきてもらわないと喋れないのが俺の性質なのだ。昔からそうだ。あちらから喋ってきてくれたら、こっちもそれに対応して話し出す。そして、大概は友達になるまでに至った。

なのに、なぜ？

答えは簡単だ。誰にも声をかけてはもらえなかったからだ。

これでは無理だと思い、こうなったら自分から思いきって声をかけてみようと思っただが、できなかった。人見知りする性格だから自分からその中には入っていけない。そして、もうすでにみんなには友達がいるから仲間には入れてもらえないなあ、と勝手に自分で思い込んでしまった。どうせ俺は邪魔者になってしまっ、とも

いや、それは自分に言い訳をして逃げているだけ。それはわかっている、わかっているんだけど……。

どうも自分から声をかけて、「よかつたら食堂でも一緒に行かない？」とか言っつて、話すきっかけをうまく作れない。友達を作るのってこんなにも苦労するとは、と思っ知らされたのと同時に、自分の性格のことをしみじみと考えては情けなくなるばかりの毎日。

もう、待つしかない。待つ、ずっと。

そして 天使は舞い下りてきた。

福田直也という男が俺に話しかけてきた。

何度か会って喋っているうちに、福田君から「遊びに来ーへん？」とお誘いがきた。嬉しかった。待ちに待った言葉だった。俺にもやつと友達ができるのだと思っていた。

なのに、なぜ？

まだ顔見知り程度の俺を初めて家に連れてきて、しかもその目的が自分の曲を聴かせるのと、自慢話をするためって、なんかおかしくない？ ってか、ハメられたの、俺って？ 裏切られたような気持ちだ。

このまま付き合いを続けていこうかどうか 答えは出ている。

ノーだ。ダメだ、あれは。あんな変わった奴と友達を続けていても、とてもじゃないが耐え切れないだろう。福田君の気心が知れない以上、接するのが面倒に思えてきた。寄り添っていても、安らぎを覚えるどころか、あじけない雰囲気に含まれ、でも必死に我慢してへつらうことなんてできない。ダメだ、あいつはダメだ。一緒にいたってちつともおもしろくなんかない。どっちみちあいつにしたって俺のことを友達と思わずに、ただの暇つぶしの話相手にしか過ぎないと考えているんだろう。

そして今 何一つ変化のない不思議な迷路の中でさまよっている俺。どこへ行っても行き止まり。

助けてくれ！ と叫んでも、誰も助けてくれない。

だって、孤独なんだから……。

俺はどうしたらいいんだ？ どこへ向かって行けば、出口に辿り着けるんだ？

明日が今日の延長線なんて、もうまっぴらだ。

だから、出口を必死になって探す。満たされたい一心に迷路の中を駆け回る。

出口には誰がいるんだろうか。理想の人が俺を待っていてくれるんだろうか。

孤独から抜け出すには、出口に行くしかない。

だから、走る。やみくもに。

今日は、出口への光が見えたと思いきや　　行き止まり。
ダメだ、こりゃ。

雨は、降りそうでもまだ降らない。

先程通った土手の周りをまた歩く。すると、さっき俺が微笑ましい光景だと言っていた当の少女がまだベンチに座って、川を眺めていた

俺は少女の後ろの位置にある芝生に足を伸ばして座った。背景には、住宅が連なっていて、その間に挟まれているちっぽけな公園の中にある柱時計を見ると、時刻は午後五時過ぎ。まだまだ帰るのは早い。

俺は少女の背中を見つめていると、ハゲでも凜々しい英語の教授がこの前喋っていた話を思い出した。

恋愛をするときは、自分にはないものを持っている異性と付き合ったほうがいいんです。性格や好み、意見などが違ったりしている正反対の人だと相性が合わないと思われがちですが、自分にはないものを持っている人のほうがかえって興味を持つようになり、うまくバランスもとれて、安定した関係を築くことができると思いますよ。恋愛を長く続けたいのなら、正反対の人を選ぶといいかもしれませんね。

そりゃそうだ、とあのおときはただ納得するばかりだった。

福田君も彼女ができたみたいだけれど、これからはちゃんとした恋愛を築いていけるんだろうか。福田君の持っていないものが、その彼女にはあるんだろうか？

いや、羨ましいんじゃないかって……って、なんであんな奴ことなんか心配しなきゃならないんだよ、クソッ！

うつむいた。友達作りってこんなにもうまくいかないなんて……。

「疲れた」

呟いて、俺は起こしていた半身を寝かせた。仰向けのまま、手を

頭の後ろに組んで、曇り空を眺めた。

孤独に慣れてきているせいか、こうして寝転んでも恥ずかしくな
んかない。むしろ、こうしているときに今の自分にとっては一番気
持ちはいい。

もう、友達作るなんてどうでもよくなってきた。できない奴はで
きないんだ、と自分に言った。このまま大学卒業するまで孤独を貫
いてやろうか、とも。

でも、やっぱりそれは嫌だ。大教室で大勢の学生に囲まれながら
講義を受けているときの胸苦しさと孤立感、俺は今本当にこの世に
存在しているんだろうかと疑ってしまうときもある。このまま社会
に出たら、どうなるんだろう……後が恐くなってくる。そんな自分
の弱さに、益々情けなくなってくる。

大学には、全国の各地からいろんな人が入学してくるせいか、個
性豊かな人たちが溢れている。中には、生理的に受けつけない人も
いる。髪をぼさぼさに伸ばした昔のヒッピーのような奴や、デブで
いつも体中に臭そうな汗を漂わせている奴、いつも笑顔で全く何を
考えているのかわからんような奴など、さまざまだ。

もうヤケクソだ。今まではまともな相手にこだわっていたけど、
もうこの際誰でもいい。

どなたか、友達に注いでいる愛情を、五分の一でもいいですから、
俺にも分けてください。

前原健司を愛してください。

絶対、良き友達になつてみせますから……ん？

頬に何かが落ちてきた。何だろうと思っっている瞬間に、液体の粒
が右目の中に入った。雨だ、と立ち上がったときには、一気に大量
の雨滴が降ってきた。ずっと降らずに溜め込んでいた分、激しさ倍
増だった。

やっぱり今日についてねえ。

俺は急いで芝生を上り、鞆の中から折り畳み傘を取り出して、さ
した。そして、そのまま帰ろうとしたが、あの少女は雨が降ろうが

呆然としている。俺は奇妙に思い、芝生を降りて、川岸の土手に足を踏み入れた。土はすでにぬかるんでいて、小さな水溜りがあちこちにできていた。

少女に近づいていくが、彼女は微動だにしない。肩にまで伸びている黒い髪はしっとりしていて、ブレザーも水分が含んで重みがありそうだ。

何を我慢しているんだろう。

「傘も差さずにそんなところに座っていると、風邪引くよ」

傘を半分少女の頭の上に被せながら、躊躇わずに俺は言った。

すると、彼女は小さな悲鳴を一回上げて、俺の顔を見てきた。思った通り、化粧気もない、真面目でおとなしそうな子だった。垂れ目がちで優しそうな瞳。前髪は額にぺたりと張りついていて、寂しげな表情で見つめてくる。

ふと紺のスカートから覗く彼女の白い足に目をやると、ブルブルと寒そうに震わせていた。

「そんなにがくがくしてえ。寒いんだろ？ 雨の当たらない場所に移動しないと……」

「いいんです。ほつといてください」
うつとうしそうに言う。俺は「そうか」と言い残し、後ずさりした。

だから、何を我慢しているんだ！ 自分とは何かっていうアイデンティティーを求めるのは大事だけれど、雨に当たってまでするか、普通。いや、実はそんなことではなくて、何かあったのかもしれない。人には言えない何かがある。今のあの寂しそうなあの子の顔を思い浮かべると、何か悲しい出来事があったに違いない。雨をも忘れて物思いにふけている様子が、俺をそう思わせる。

何が、何があったんだよ。

少女のことが心配になってきて、俺は後ろのほうで固唾を呑んで見守った。

間もなくして雨は止み、元の曇り空に戻った。少女は腕を組むよ

うにして胸に当てて、寒そうに身を縮めていた。

見てられなくなり、俺は傘を畳んで「大丈夫か？」と鞆に入っていた大きめのハンカチを差し出した。

彼女は迷惑そうに俺を見つめてどうしようか迷っている素振りをし、しばらくして「ありがとございます」と消え入りそうな声で言っただけを受け取ると、おもむろに濡れた体を拭き始めた。

「あのさあ、そろそろ家に帰ったほうがいいんじゃない？ もうすぐ夜になるし。服も早く着替えないと、風邪ひくよ？」

「……帰りませんから」

少女は立ち上がって、持っていたハンカチを俺に返した。

「えっ、ちよつと、どこ行くの？」

少女は何も言わずに、うつむいたまま俺から離れていった。すぐそこで通りかかったスーツ姿の男性とぶつかった。でも、なんとかその場をやり過ごしたようで、重い足取りで前へ進んでいく。

ああ、もう見てらんないよ。やさしそうな人だったからよかったけど、恐そうな人だったら絡まれてるところだったってば。それに帰りたくないって、どういうことだよ……まさか家出？ やばいよ、それって。尚更危なっかしい子なんだから。

俺は急いで彼女の後を追った。

「なあ、帰りたくないって、もしかして家出？」

声をかけると、少女は足を止めた。少し睨みつけるようなまなざしを俺に向けると、不意に彼女のつぶらな瞳から涙がにじみ出てきた。両目を手でふさいで、その場で泣き出し始めた。

「ちよつ、ちよつと、泣くなよ」

俺は戸惑った。見渡すと、周囲にいた人たちによる冷たい視線が俺のほうに向けられていた。何が何だかわからなくなってきた。

「なあ、こんなところで泣いてないでさ、えーつと……じゃ、とりあえず俺ん家ちに来る？」

喋り終わってから、ハツとした。何言っただ俺、そんなに安々と来るもんか。

少女はためらうように後ずさり、両手を顔から離すと、俺をじつと見据えた。どうするべきか戸惑っているようだ。

そうしているうちに涙も乾いた彼女は、震える声で「いい、いいんですか？」と訊いた。

びっくり仰天した。その言葉、そっくりそのまま返すよ。確かに俺は、口からの出任せで家に來るかって言ったけれど、あっさりとしかも、いいんですかって、なんかおかしくないか。

「……ああ、いいよ」無意識に言葉が。

とにかく他の人たちの視線から逃れた一心で、俺は背を向けて、ぬかるんだ土手を足早に歩いた。後ろを振り返ると、なんと下を向いておそるおそるながらもついてきている。

おいおい、ほんとについてきちゃってるよ。ってかなんでだよ？俺のこと疑ってないのかよ。見知らぬ人についていけないようにと学校で習わなかったのか？ あ、そういえばついこの前、三十代ぐらいの男がインターネットで知り合った少女を自宅に呼び、三週間も監禁した上に乱暴し続けていたという事件があったなあ……うん、俺はもちろんそんなことはしないけど、なんでそんなに簡単についてくるの？ もしかしたら監禁されるかもしれないんだぞ。ああ、もう意味わかんねえよ。かといって、放っておいてもこの寒い夜を濡れた格好でどうやって過ごすんだろう。なおさら危なっかしい子なんだから、ほっとけるわけねえよなあ。はあ、とんでもないことに絡んじやったよなあ。

少女にまたハンカチを渡してから、夕日が沈んですっかり暗くなった夜空を見上げた。絶え間なく聞こえてくる後ろのほうの足音が、俺の不安を掻き立てる。

第二話

アパートの階段を上がろうとしたところで、まてよ、と一旦足を止めた。

やっぱり、この子に家に帰るように説得したほうがいいかもしれない。何があつて家出をしているのか知らないけれど、この子の両親だつてきつと心配してるはずだ。でなきゃおかしい。それに、まだ未成年の少女を泊まらせるのつてやっぱり犯罪になつちやいそうだからなあ。警察沙汰になるのは嫌だし……。

「あの一さあ」

神妙な面持ちで振り向くと、少女が憂色を漂わせながら、

「や、やっぱり迷惑なら、いいんです。なんか、悪そうで……あ、すみませんでした」

と言つて、握り締めていたハンカチを俺に返してから暗がりの道を引き返していった。

「えっ、ちよっ……」

ど、どうしよう。このまま見捨てて、もし何かがあつたら……ということは、俺の責任になる？ ああ、もうどうしたらいいんだよ。

一瞬、吹雪のような風が吹く。俺の目に映るまだ乾ききつていない制服を着た少女が身をこごめ、寒さを堪え忍びながら歩き続ける。いったいどこに行く気なんだよ。どこか行くあてでもあるのかよ。やっぱし、ほつとけねえよ。わかつた、わかつたよ。

「ちよつと待てよ」俺は駆け寄つた。「なあ、泊まつてけよ」

「でもお……」

遠慮がちに言う。

「全然大丈夫だから。な？」

俺つて、なんてお人好しなんだらう。

「ほんまに、いいんですかあ？ やっぱ迷惑なんじゃあ……」

それでも不安そうに訊いてくる。

「いいから、いいから。さあ、行こう」

俺は促した。少女はおどおどと俺の後ろについてきた。

俺に気使いするよりも、もっと自分のことを気にかけてほしい。

俺がもし、強姦目的で部屋に誘っていたとしたらどうするんだ。あと、できれば自分の両親のことも心配してほしい。親が、自分の子供を心配するのは当たり前だ。たとえば、家出の原因が親であったとしても。

俺の住む一〇三号室の前まで来た。もう、ここまできたら後には引けない。やれるところまでやろう。深く息を吸い込み吐き出す。

ドアを開けた。

俺はすぐ後ろを向いて、「靴を脱いで、奥の部屋に行つて」と促した。

入つてすぐにキッチンがあり、奥の部屋が居間みたいなものだ。

散らかりがほとんどないのも相まって、室内はけっこう綺麗なほうだと思ふ。でも、こんな狭苦しい所に、こんな純情可憐な子を泊めさせてもいいんだろうか？ 嫌がらないんだろうか？

少女はドアの前の廊下で佇んでいる。俺は「大丈夫だから」と手を差し伸べようとすると、拒絶するように体をそむける。やはり見知らぬ男の部屋に入るのは恐いんだろう。無理もない。やつと自分の身のことを心配してくれたので、それに安堵した。が、俺はどう対処したらいいのかわからずに、夜の景色を眺めながら考え込んでいる少女を見つめていると、振り返るやいなや、「よろしくお願ひします」とおじぎして、こわばった顔つきをして入つていった。俺は、ドアノブを持ったまましばらくその場で呆然と少女の背中を見送った。

キッチンに入り、冷蔵庫の中を覗いた。あるのは、たまご、レタスなどの野菜類……お、肉もあつた。まだどれも賞味期限は大丈夫。これでなんとかなるだろ。

ここにある物で夕食を作るから待つといつたために、俺は奥

の部屋に入った。が、少女は隅っこのほうでじっとうなだれたまま突っ立っていた。

やっぱり恐くなったのかな？　ってかそれが普通だよな、うん。

俺は少女の前に立ちほだかった。

「ねえ、俺のこと恐くないの？」唐突に切り出した。「ほんとに俺のこと疑ってないの？」

「えっ、疑う？」

少女は顔を上げる。

「だからあ、訳のわからないような人、つまり俺なんかについていて、何ともないのかってこと」

「……最初は、その、恐かったんですが……」

「確かに、普通は怪しむよね？」

「でも……そのー、ほんまに良い人そうだって思って」

「良い人そう？　俺が？」

「は、はい……」

俺は思わず目を逸らした。仕方なくここに来たっていう感じで我慢しているようにも見えるけれど、なんだか不思議と嬉しい気分になった。

「……まあ、いいや。とりあえず今日はここで泊まってよ」

俺は愛想笑いで言った。

今日一晩過ごしたら、きっと家族が恋しくなって、帰る決心が固まるだろう。

「あ、ありがとうございます」

微かな微笑みが彼女の口元に浮かんでいた。

「お、笑えるじゃん」

少女は、はにかんでうつむいた。それを見て、彼女のことを助きたいという思いが強くなった。

台所に入って、さっそく料理開始。ほとんどはコンビニの弁当を夕食としているけど、今日は特別のお客さんということで久しぶり

に腕をふるつての調理。別に、料理を作れないわけではないんだけど、ただ作るのが面倒くさいだけだ。

肉とピーマンを使っての野菜炒めを作り、ボウルにサラダを盛り合わせる。あとは、卵焼きを作って、白ごはんは炊いてないけど一応漬物をつけておいて、出来上がり。体裁はダメだけど、味のほうはなんとかなるだろう。

お盆に乗せて、奥の部屋に入る。どうやら着替え終わっているようだ。少女はストーブに当たっていた。濡れた制服やソックスは、渡してあったハンガーできちんと窓辺のほうにかけてあった。まあ、じきに乾くでしょう。

「寒くない？ 大丈夫？」

「は、はい」

と言いつつ、少しぶるぶるしてるのはなぜ？ まあ、あんなにずぶ濡れだったんだから仕方ないか。

「あ、これ晚饭。簡単なので悪いけど」

「いえ、そんな……あ、どうもありがとうございます」

気まずそうなそぶりを見せながら、お盆を受け取ってくれた。俺に対して迷惑をかけているとは思っていても、今は誰かに頼っていたいって感じにも見える。

「どう、その服。おつきすぎない？」

「いえ、全然大丈夫ですよ」

身長が一七四センチの俺の服を着られるとは……。中学三年生だとさつき教えてくれたが、中学生の女の子にしては意外に背が高いのかもしれない。まあ、それはそれでよかったんだけど、でも、やはりジーンズの裾の位置が非常に気になってしまふ。あと、トレーナーが少しぶかぶか。いや、それよりも男性の服しか与えられないのが残念だ。そりゃ、俺が男だからしょうがないんだけど。

やっぱり、明日にでもユニクロで服を買ってあげようか。こんな孤独な俺を信頼してくれている彼女のために、俺はやるぞ。彼女に喜んでもらえるように何だっやってやる。そういう決意がぐつと

固まった。

「あのー」憂いの帯びた瞳で俺を見つめてくる。「ご飯は……」
言つと、思った。でも、何も言われないまま気にせず食事を始められても困るから、ほっと胸をなで下ろした。

「いや、俺のは後でコンビニで適当に買うから、気にせず先に食べてよ」

「でも……」

「いいからいいから。早く食べちゃって。お腹空いてんだろ？」

「はあ……では、お言葉に甘えて」

少女は、いただきます、ときちんと合掌して食べ始めた。最初は申し訳なさそうにゆっくりと食べてはいたが、だんだんと食べ方が変化していき、しまいには口に押し込むようにむさぼる。

よほどお腹が空いていたんだろう……おお、そうだ。一応、何で家出をしたのか聞いておかないとな。やはり、寂しいんだろうな。だって中学生だろ。親に反抗する思春期だからって、家族のことが

心配になるのは当たり前だ。そうだよな、普通は。

俺は奥の壁にもたれかかって座り、中央にあるミニこたつに入りながらがつがつと食べている少女を見つめた。

「寂しくない？」

少女の動きが止まった。

「別に……」

「ほんとに？」

「……はい」

また箸を動かす。

ウソだ。寂しくないはずがない。誰もが慣れない所にいると、本能的にさびしくなってくる。口だけはいくらでも言えるけれど、内面はすごく寂しいに違いない。

「後悔とかしてない？」

「してませんよ」

怒ったような口調に、びっくりした。

少しでもそのようなそぶりが窺われるんなら、やんわりと説得して、明日にでも家に帰るように促すつもりだったが、それは全く見受けられない。となると、家出の意志が非常に強いのもかもしれない。

「なあ、何があったのか、話してよ」

真意をひた隠しにしたような張り詰めた表情を浮かべて、黙々と食事を続ける。噛み砕く音しか聞こえない。

「なあ〜」

「……………」

ダメだこりゃ。俺だつてさすがにずっとここに泊まらせるのは無理だし、何よりこの子の家族に心配させるのがやはり俺には耐えられない。今頃、警察に捜索願を出しているのかもしれない。となると、どっちみち早く帰ってもらわないと、俺にも責任がのしかかってくる。そのためにも俺が今、なんとかしなければいけない。

さっそくいろいろと質問してみた。

答えてくれないかもしれないと覚悟して、どっから来たのか聞いてみると、意外とあっさり答えてくれた。聞いた限りではこの辺からある程度近かったので、ほっとした。しかも驚くことに、家出の経路まで教えてくれた。今日の朝、いつも通り学校に通う途中で急に思い立ったのだという。聞くところによると、学校はかなりの有名な私立校だ。いつもの駅を降りずにそのまま乗り続け、適当な駅に降りて、あてもなく歩き回っているうちに、ちょっと休もうと土手のベンチに座り、しばらくして雨が降ってきて、何だか動けずにいると、俺が声をかけてきた、と。お金は定期での乗り越し清算とコンビニで買った昼飯のおにぎり一個でほぼ全額使い果たしたらしい。

もし俺が声かけてなかったら、今頃この子どうしてたんだろう。

そう思うと、少しぞっとした。

落ち着いてなだらかに話す様子を見て、再度家出の理由を聞いただしてみたが、表情をにわかに曇らせ、つぐんでうつむいてしまっ

た。

「……わかったから、早く食べちゃってよ」

少女はせかせかと食事を再開した。

今はもうこれ以上は家出のことは言わないほうがいいな。とにかくこの子を元気づけることが先決だ。人には言い知れぬ悲しい思いをしているこの子を喜ばせるのは、至難の技かもしれない。自然に
いこう、自然に。

「俺は」まずはお約束のこれで。「健児って言うんだけど、君の名前は？」

「わ、私ですか？ えー、み、ミユキと言います」

言い終わると、残りのサラダを一気に口に入れる。

「へえー、ミユキって言うんだ……」

「むあー」口の中でもぐもぐさせながら、「ぞーなんでずう」

アツハハ。何、言ってるんだよ。俺はそれがおかしくて、腹を抱えて笑った。アツハハ。涙が出てきた。あー、腹いてえ。って俺は、いったい何やってんだ。目の前には、かよわそうな女の子。なんでこんなことになってんだか、益々わけがわからなくなって、笑って笑って、また笑った。

我に返りミユキに目を向けると、俺のほうを怪訝そうに見つめていた。料理はもう食べ尽くされていた。

「あー、ごめんごめん。あつ、ところで、ミユキってどういう漢字で書くの？」

「えつとー、ミは美しいの美で、ユキは冬に降る雪ってやつです」

美雪 顔に似合わず、けっこう大人っぽい名前なんだなあ。今時、こういう名前の人も少ないような……なんか演歌っぽいし。

「ちなみに俺は、健康の健に、幼児の児。なんか、俺のほうが子どもっぽい名前だよな」

「いえ、そんなことないですよ」

「まあいいや。とりあえずよろしく」

「あ、は、はい」握手を求めた俺の手に、震わせながら小さい手を

絡ませた。「ど、どうかよろしく願います、け、健児さん」おどおどしながら。

美雪に名前で呼ばれて、何だか照れくさくなった。お互いに頬が弛んだ。

さて、彼女と仲良くなることにひとまず成功した。大学でもこれができるくらいなのに……。まあ、今はとにかく美雪の家出の手助けをすることが大切だ。彼女をさりげなく説得して、無事に家族のもとへ帰す。とても重要な任務を課せられている。責任重大だ。でも、ほのぼのとした会話の中で何度か見せる美雪の笑顔を見てみると、こっちも元気が湧いてくる。がんばって目的を達成してやろう、と。

外に出ると、さつきよりも気温は下がっていた。俺が泊めさせておいてよかったよとつくづく思う。

銭湯までの道のりはそれほど遠くないのだが、夜冷えをしないように分厚いジャンパーを身につけさせた。電灯を頼りに、人気のない薄暗い道をお互い横に並んで歩く。美雪のほうに少し寄りつくと、咄嗟に離れるので、俺は気を使いながら足を進めた。

さつきまでまた雨が降りしきっていたんだらう、大きさまの様々な水溜りがアスファルトに点在していた。踏んで靴が濡れないようによけながら歩く。歩道一面に雨水が広がっているようなら、そっと目配せをして、二人そろって飛び越えてみせる。が、踵がひんやりとした。惜しい。

銭湯が見えてきた。ちょうど書き入れ時のはずだけれど、今日は人の出入りが少なかった。俺は美雪にお金を渡して女湯に入るのを見送ってから、すぐ手前の公園で時間を潰すことにした。濡れていたブランコをハンカチで軽く拭いてから座り、何気なく携帯をいじっていると、メールが届いていた。福田君からのが一件。思った通り、例の話の続きをするからどこかで会わへんかとのメール。うざい。しつこい。嫌だこんな奴は。絶対に嫌だ。

俺は適当に返信をして、夜空や客足のまばらな銭湯を眺めたりした。そうしてぼーっとしていると、誰かが公園に入ってきた。振り返ると、スマモト君だった。

スマモト君は福田君の友達つながりで知り合った。けれど、挨拶を交わす程度の関係なので、友達というよりも知り合いだ。俺と同じ関東出身らしく、寮生活をしているという。

「おっ、どっかで見たことあるなって思ったら、ん、誰だっけ？」

そう、えーっと、ああ、前原君」

俺は黙って頷いた。

「こんなとこで何してんの？」

「いや、……まあちょっとした散歩みたいなもんかな。スマモト君は？」

「ああ、バイトだよバイト。結構長引いちゃってさ。気づいたら、もう九時過ぎててびっくり」

握っていた携帯を見ると、時刻はもう九時半になっていた。美雪が銭湯に入ってからもう二十分近く経つ。もうそろそろ出てくるかもしれない。って、やばいよ。今出てこられたら、スマモト君に知られてしまうじゃないか。早くどっかに行ってもらわないと。

それに気づいたときにはもう遅く、スマモト君は話を始めてしまった。普段は俺とは会話なんてしないのに、こんなときに限って……。

俺は軽く聞き流しながら、どうしようかと考えた。よし、これでいってみよ。

話が途切れるのを窺って、「なあ、寒くなってきたし、そろそろ帰ろうか。俺、ちょっと早く帰らないといけないから」と言ってみた。

「えっ、早くって、何かあんの？」

「いや、その、ちょっと見たいドラマがあってさあ」

やばい、美雪が銭湯から出てきた。俺を見つけると、おそろおそろこっちに向かってくる。や、やばいって。

「そっか」

疑っていいない。スマモト君がよそ見をしているすきに、俺は急いで美雪に、先に行つとけ、と手で合図をした。飲み込んでくれたよ
うで、小走りで銭湯から離れていった。

「それじゃ、そういうことで」

さりげなく言つて、ゆつくりと立ち上がり、後ろを振り向かないで足早に公園を出て、そしてダツシユ。美雪に追いついても、まだスマモト君が後ろから見ているのかもしれないので、俺は他人のふりの如く、彼女を追い越して走つた。美雪もちゃんとしてきてくれた。

公園からかなり遠ざかつてから、スピードを緩めた。ここまで来たら、大丈夫だろう。

「ごめんごめん」

息を切らしながら美雪に謝つた。

「ハア、ハア……」美雪も喘ぎながら、「あの人、友達なんですか？」

「う、うん、まあな」

本当はただの知り合い関係なんて言えない。あのまま、普通に話に花を咲かせていたら、もしかしたら友達になれていたのかもしれない。そう思うと、惜しい気持ちもするけど、今はただ自分に課せられた任務を成し遂げることが大切だ。

「いやー、危なかつたなあ。美雪が出てきたときはどうなるかと思つたよ。なんとか巻けたしよかつたけど」

「ほんまにすいません。うちのせいで……」

「しょうがないって。ばれたら、それで終わりなんだから」

美雪は急に頭を垂らした。ほんとに申し訳ないと思ってるんだろうか。別に、アイツとは親しい仲でもないから、そんなに気にしてなくてもいいのに。思いやりのある子だ。やはり、きっと、実をいうと、家族のことに對してものすごく気にかけてはいるんだろう。そうじゃなきゃ、おかしい。

「なあ、缶ジュースでも飲む？ うーんとあつたかいの」

「いえ、いいですよお、そんなあ。そんなにお金払ってもらわなくても。なんか悪いですし」

「いいんだよ。どっちみち、お金がすつからかんなんだろう？ 家を出している以上、俺がお金を出さないと今は生活できないんだから。遠慮することはないって」

「はあ……」

といつても、先日バイトを辞めて、今新しいバイトを探している俺にはお金にそれほど余裕がない。でも、気の向くまでうちに泊めさせてあげたい。親からの仕送りでなんとかやりくりすればいいけどだし、お金がなくなればまたそのときに考えればいい。それまでに、家に帰る決心をしてくれるのを祈って。

「俺さあ、ほんとに美雪を助けたいんだよ。だから、ほら、買ってやるから」

コンビニでカップ麺を買ってから俺は、その横にある自動販売機に立ち寄り、百二十円を入れて、どれにするのか美雪にボタンを押させた。彼女が選んだのはあつたかいコンポタージュ。俺がそれを取って渡してあげると、両手で持って嬉しそうに笑みを浮かべた。

「さあ、行こうか」

アパートまでの道 美雪はなぜかさつきよりも俺のほうに寄ってくるので、気恥ずかしくなつて、なんとか付かず離れずの距離を保ちながら微調節をした。俺に心を許したように見せる表情。やわらかい表情をすることにより一層かわいらしく見える美雪の顔を眺めるのが密かに楽しみになっていた。

家に帰ってから俺は、ご飯を食ったあとに急いで風呂に入った。

美雪には、それまでに着替えておくように言った。さすがに下がジーンズでは寝にくいだろうと思い、俺のトレーニングウェアを貸してあげた。少し大きいかもしれないが、支障が生じることはないだろう。

風呂に上がり、部屋に戻ると、疲れているのか組んだ腕をこたつの上に乘せて、それを覆い被さるように頭を垂らしてうとうとと居眠りをしていた。

「よほど疲れてんだね」と俺が声をかけると、はっと顔を上げた。

「ちよつと、眠くなつて……」

「じゃあ、布団敷こうか。そのの、横の部屋にあるベッドで寝るといいよ。俺は床でも全然いいし。ああ、あと、寒ければ湯たんぽもあるけど、どうする？」

「えーとお……いえ、もう任せます」

「いや、任せますって言われても……だからさ、遠慮することなんてないんだから、ね？ もう一度言っけど、ほんとに寒くないの？」

「ゆ、湯たんぽもお願いします。」

「そう、素直でよろしい」

俺は、この部屋の押し入れか布団類を出した。家にはちよつとお客様用がある。遊びにきた家族が、友達が、はたまた恋人が、もしここで泊まるようならと思つて、一応置いてあるんだけど、やつと、初めて役に立った。

寝られるようにちゃんと整えてあげてから、俺は勉強机に向かった。

「これから勉強するんですか？」

「ああ。来週にテストがあるから。忙しくつてできなかったから、今やろつと思つて」

「ほ、ほんまにすいません。うちのせいで……」

「だからあ、もういいから、気にしないで、早く寝てよ」

「あ、はい」美雪は不意に笑みを浮かべ、「健児さんつて、ほんまにええ人なんですな」

「へ？」

「うちなんかのためにいるんなことしてもらつて……なんか、それがめっちゃ嬉しいんです。うち、ほんまに、健児さんみたいな信頼

できる人で安心しました」

俺は美雪から少し視線をそらし、「あ、ああ、いや、別に……その、やっぱり困ってる人がいると助けたいっていうのが当然だもんな」と照れ臭さを隠しながら言う。

すると突然、美雪は何かを思い出したかのような口調で、「健児さんはいいですよ。親から勉強やれ、とか言われなくて」

「えっ？」

「誰にも言われなくて気楽に自分のペースで勉強できて……」

「な、なんだよ、急に」

「えっ、いや、あ、すいません変なこと言っ……あ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

そそくさと布団に入った美雪を見てから、俺は電気スタンドをつけて、部屋の蛍光灯を消してあげた。

「家が恋しくなったら美雪んちに夜中でも送ってあげるから、安心して寝て」

何気なく言った。返事はなかった。まあ、いいけど……。

よし、さっそく始めるか。

椅子に座ったとたん、急に体がだるくなり机に突っ伏した。少しの解放的な気分とはまた別の、違和感のある感じだ。今日、家出少女を連れ帰って泊めさせてあげるなんて、普通では思いも寄らない出来事だ。それは実感している。けれど、そんな出来事に実際に直面して、今までに感じることのないような変な気分だ。なんか、どつと疲れる。いや、俺なんかよりも美雪のほうが一番疲れているんだろう。やっと落ち着いてきてはいるものの、時折消え入るように儂く見えるのはなぜだろうか。まあ、これからどうするかはまた明日考えることにして、とにかく今日はゆっくり寝て、体を休めなさい。

気合を入れ直して俺は、勉強に心血を注いだ。

大学のテストは、高校までのような空欄に当てはまるものを埋め

たり、記号で選んだりと比較的暗記したらできるといった問題の類いではなく、（英語以外は）主観を伴うレポート形式が多い。テーマは、授業で習ったことがほとんどで、あらかじめ知らせてはくれる。けれど俺には、こういうテストはどうしてか先生に気に入られるような文章を書くことに意識してしまう。そういう姑息な魂胆から、どういう手順で論述を進めていくのかの思案に時間がかりすぎてしまう。俺はみんなみたいにどうしても要領よくできない。確かに、結果がどうであれ、卒業するのに必要な単位さえ修めればそれでいいんだけど……。

おおよそな手順が決まり出した頃には、かかっていたエンジンが急に弱まり、車のごとくエンストしてしまった。でも、気づけば日付が変わっていたし、切りもいいので続きは明日にすることにした。

俺は明日の学校の用意をして、いざ布団に向かう前に、美雪の寝ているベッドにそおっと近づいた。

顔は端の壁のほうに傾いていて、寝息が微かに聞こえる。覗き込んでも薄暗さと乱れた長い髪に隠れて寝顔がはっきりとわからないが、ただ美雪の頬だけがくっきりと見えた。餅のようにやわらかそうな頬。一瞬、美雪の笑っている顔が脳裏に浮かんだ。俺は不意に美雪の頬に顔を近づけたとき、突然うめき声が聞こえて、驚いて顔を離れた。美雪は俺のいるほうに寝返り、また寝息に変わった。

俺は、彼女の安らかな寝顔を見てほっと胸をなで下ろしてから、カーテンを閉めて部屋を一層暗くし、布団に入った。

第三話

微妙に冷たい風がうつとうしい。雨はすっかり上がり、水溜まりもほとんど乾いていた。

美雪と見慣れた道路を歩く。今日の授業は午前だけだったので、近くのユニクロで安い服を買ってからすぐに帰り、せっかくだしどこかに行こうかと俺が提案。家にずっといさせるのが彼女にとってはいいのかもしれないが、それだとお互い気まずいような気がしてならないのだ。それに、ちょっと外に出るだけでも彼女にとっては落ち着くだろう。まあ、この近くだと美雪の知り合いに会う確立は極めて低いだろうし、今日は平日だから美雪の友達も学校に行ってるから大丈夫。俺の知り合いはというと、そんなにいないし、福田君とかもおそらく大学にいると思うから大丈夫だろう。まあ、そんなに気にしていいたら、何も始まらない。

美雪は俺の提案を聞いて、同意してくれた。すごく嬉しかった。でも、外に出れば、もしも美雪を捜索している人たちに出会ったら、少女を連れ回したという誤解から厄介なことに発展するかもしれない。発展しなくても、美雪の家族にすごく迷惑をかけているのは事実だ。訴えられてしまうだろう。そうなると、退学処分になっちゃうとか。いや、でも、ここまできたらどっちにしろ結果は同じだろう。こうなったらやけくそだ。とにかくやれるところまでやろう。そうだ、しっかりしろ俺。

「なあ」

「はい？」

「くどいようだけど、家に帰りたいとは思わないの？」

さつきから笑顔を絶やさずに喋っていた美雪が、いぶかしそうな目つきで俺を見る。

「はい。全く」

うつむいてしまった。

「んー、でも、絶対にお母さんとか心配してると思うよ。もう警察にも連絡入ってると思うから、大騒ぎにならないうちに早く……」
「やっぱり、うちのことが迷惑なんですか？」

「いや、そうじゃなくって。美雪のためを思っ……」

「ね、健児さん、うち、ほんまに帰りたくないんです。今はただずつと家から離れていたいです」 美雪は畏まって、「お願いです。も少しだけ泊めさせてください」と深々と頭を下げた。

そんなことされても……。

「私を助けてください！」

感情的な声も入り混じって。

「……わ、わかったわかった。いいよいいよ、何日でも。気の向くまでずつと」

「ほ、ほんまですか？」

頭を上げ、目を輝かせた。感情の起伏が激しいな、この子。

「おう。俺も、もう家出のことは言わないよ」

美雪は満面の笑みを浮かべた。

彼女を助きたい。それは本当だ。だけど、そんなに期待されるとこつちだつてプレッシャーがかかる。おまけに、今のでこの先のこととがますます心配になってきた。美雪の家族のことが……いや、本当に美雪の期待をずっと応え続けることができるんだろうか。

でも、相手が助けてって言われたら、やはりほっとけないのが俺。なんとかすると言つた以上、やるしかない。きっとなんとかするはずだ。オシツ、と顔をピシヤツと叩く。

昨日の土手に足を運ぶと、辺りは昨日よりも賑やかになっていた。若いカップリが横を通り過ぎると、気恥ずかしくなつて、思わず横を見る。美雪も恥ずかしそうに帽子を目深にかぶっている。

「健司さん」美雪が言った。「思えば、夫婦つて不思議なもんですね」

いきなりこんなことを言われて、きよとんとした。

「何億という人間の中から、たった一人と人生を共にするんですから」

俺は、喉を長く引いて鳴らした。苦笑いで、「そうだよな」と答えた。

「偶然なんかで夫婦は結ばれないと思うんです。やっぱり運命なんですよ、それも。だから、私が、あんな家族の娘として生まれたのも運命なんですね、やっぱり」

俺は黙って首をかしげる。美雪は続けて何か言いかけようとしたが、俺は「ほら、早く行かないと映画始まっちゃう」とはぐらかすように、雲の上がった青空の下を足早に歩いた。

土手から大学へ行く道を正反対に目指せば、最寄り駅がある。その周りにはショッピングセンターが連なるようにそびえたっている。

その中には、映画館もある。まず最初のお目当てはここ。他にもいろいろと提案はしたけど、映画のタダ券を持っているということに即決定。そして美雪に、今見たい映画は？と聞くと、「ファンタジー系がいいですね。あ、今やってるジブリの新作とか」

段々と遠慮することもなくなり、甘えてくれるようになった。ほっとしている。やたらと気にかけてくれる気持ちは嬉しいんだけど、繊細で線の細そうなこの子と接するのは、なんかものすごく気を遣う。

ジブリの新作を見終わったあと、ついでに近くのファーストフード店で昼飯を済ませることにした。

「おもしろかったですね。もう最高でした」

食べているときも、映画のワンシーンなどの感想をしきりにああだこうだと喋ってくる。

「それはそうと美雪、さっき泣いてただろ？」

「えっ、わかりました？」

「だって鼻水スースーいっちゃって」

「そんなあ……別にいいじゃないですか」

美雪の頬が少しふくれる。不覚にもぎゅっと抱きしめたいって思っってしまった。

「でもさあ、俺、映画見て感動して泣いたとかってのはないなあ」

「そうなんですか。うちは、すぐ泣いてしまうんですよね、感動すると。映画なんて滅多に見ないからかもかもしれませんが」

「なあ、またいつか一緒に行こうよ、映画見に」

「は、はい。ぜひまた、行きましょう」

すっかり打ち解けた雰囲気になってきた。お互いに緊張の縄も解けて、話がはずむ。俺、こんなに人と親しく話をしたのは何ヶ月ぶりだろう。

しばらく周辺をうろつろして、この辺では人気の高いゲーセンに入った。美雪はうるたえていた。こういう本格的なゲーセンは始めてだという。じゃあつまり、デパートの屋上にあるようなお子様用のゲーセンしか体験していないってことか。俺も、関西に来てからは、誰かと一緒にこうした場所に入るのは初めて、かもしれない……。

平日なのに、今日はけっこう人が多かった。いつもは一人寂しくアーケードゲームをやったりするのだが、今回は中学生の女の子も同伴ということで、手頃なUFOキャッチャーをすることにした。まだまだ清纯で真面目なこの子に、ああいうマニアックなゲームに走ってオタクになってもらうと困るからね。

一面にずらーっと並べられている設置台を見ながら、「何か欲しいものある？」と振り向いて訊いた。が、早くも物欲しそうに何かを見つめている。

やれやれ、と俺はその設置台に向かった。キティちゃんのぬいぐるみだった。うわー、典型的だなあ。しかも、サイズがちっちゃい割には一プレイで二百円って高くないか？

「他にもいっぱいあるから、あっち行こうよ」と、なんとかその気

を移そうとするが、ねばって見続ける。わかった、わかったよ。

「じゃあ、一回だけやれよ」

美雪は瞬く間に目を輝かせて、「いいんですか」と訊いた。だから、いいってそう言っただろ。

二百円を渡し、美雪はさっそく始めた。慎重にクレーンを動かす。手が震えていた。そのせいか、狙っていたぬいぐるみの上を越えてしまったところでクレーンが降りていった。失敗。そして残念。

「さあ、他のところも行こっか」

しかし悔しいのか、美雪はまだぬいぐるみを見続ける。妙なところで負けず嫌いなんだな。

ふう〜とため息を漏らし、二百円をさらに入れた。

「えっ、なんで？」

「そんな顔してたら、どうしても欲しいっていうのがバレバレだつて。もつと素直になっただらどう？」

「はあ……」

俺は慣れた手つきでクレーンを動かす。美雪が惜しくも逃したぬいぐるみの真上にピタッと止める。そしてクレーンが落ちていく。いいぞ、いいぞ、その調子。美雪も固唾を飲んで見守る。クレーンはぬいぐるみを抱きかかえる。よし、いいぞ、そのまま浮き上がれ。期待通り、クレーンはぬいぐるみを抱きかかえたまま、上がっていく。よし、そのまま穴の中へ。落ちるな、落ちるなよ。ひやひやしなから二人でぬいぐるみを見つめる。ポトン。やったあ、キティちゃんゲットオ！

ほら、と見た目のわりには意外とふわふわするぬいぐるみを美雪に手渡した。嬉しそうにキティちゃんを見つめる。

片方だけのえくぼが可愛い美雪の笑顔を見て満足した俺は、「そろそろ行くぞ」とまたゲーセンの中を歩き出す。

正直、美雪のことが気になってしょうがない。この子をもつと喜ばせたい、もつと笑わせたい。そんな思いが、より一層強くなった。

ゲーセンを出て、人通りの少ない路地に入った。しばらく歩いてから、並木道に入り、その突き当たりが次の目的地である植物園だ。

中に入るやいなや、美雪は「一度、こういうところ来てみたかったです」と明るい声で言った。

植物園の中はさすがに温度管理が徹底されていて、外と違って暖かかった。あちらこちらには、見たことも聞いたこともない花がずらっと並んである。実をいうと、こういう所は初めてでもあるんだけれど、見ていて案外おもしろいし、飽きさせない。うん、悪くない。

散策に適した細い回廊を通った。様々な菊の花たちがそれぞれの場所で咲き誇っていた。

「日本人って、菊へのこだわりがほんまに強いんでしょね。いろんな品種がこうして見られますし、あつ、これなんか、色合いがサイコーですよね」

ニコツと笑って、ゆっくりと、ゆっくりと見ていく。

女の子の好きそうな場所だと考えてここを選んだわけだが、気にいってもらえてよかったよ。しかし、「女の子」花はあまりにも単純すぎたかもしれないが、こうしてじっくりと観賞するのは、ほんとに風情があつて素晴らしいもんだ。

でも、やっぱりこれだけは聞いておかないと気が済まない。お互い内に秘めたままじゃダメだ。もっと打ち解けるためにも、思っていることを露呈しないと。

広場にやっってきたところで、俺は決意し、美雪を促して、花壇に囲まれた噴水の近辺にあるベンチに座った。

「なんで、家出なんかしたの？」

単刀直入に、静かに言った

「えっ？」

美雪はぎょっとする。そして、いぶかしそうに俺を見つめる。

「別に、家に帰れとは言わないよ。でも、せめて動機だけは教えてくれないかなあ。やっぱり家出するってことは何か理由があるのは当たり前じゃん」

「やっとその気になったのか、美雪は大きなため息をついてから、話し出した。」

「実はうち、今受験中なんですけど、もう、嫌になっちゃったんですよ、勉強が」

「勉強が嫌って、それだけで家出なんて……」

「そうじゃないんです」と口調を強めて、鋭い顔になった。「うちんとこ、親が厳しいんです。塾にも通わされ、レベルがめっちゃ高い私立高校に入れと言われ、ずっとずっと勉強。いつのまにか自由もなくなっただけ、それがもう嫌で嫌でたまらなくなっただけ……」

「そっか。それが原因だったんだ」

「なんかありそうなパターンだな。でも、ここは慎重に言葉を選んで励まそう。」

「たとえ厳しくたって、みんな結局は同じ状況なんだからさあ。だから、がんばって勉強して受ければ、あとは楽しい高校生活が待ってるから、今だけ我慢す……」

「あのー」言葉を遮られた。「ほんまに、ほんまにがんばったら、何かええことあるんでしょうか？」

「えっ……いや、何言ってるんだよ。高校に受ければ、楽しいことがきつとあるって」

「保証できますか？ 努力したら必ず報われるって」

「な、何言出すんだよ、いきなり。」

「新しい友達を作って、彼氏も作って、クラブ活動にも打ち込んだりしてさあ、青春をたっぷり満喫できるじゃん」

「でも、それってほんまに実現できるんですか？」

「それはお前次第だよ、と口から出かかったけど、すぐに飲み込んだ。」

「俺が返す言葉に詰まっているのを見透かし、「そうですね」と

わかったように呟いた。

「……いや、その……」

「たとえ良い高校や大学に行けたとしても、絶対に将来幸せになるとは限りませんもんね。最近、そう感じるようになってから……が
んばるのが、なんかばかばかしくなってきた」

お互いしばらく黙り込んだ。

「なあ、やめよつかこんな話」俺は立ち上がって、「そろそろ暗くなつたから、外に出てどこかで食べよう」

「……はい」

足早に出口へ向かった。

違う。そうじゃない。がんばれば、いいことだつてあるはずなんだ。そう思わないと、何もできなくなるじゃないか。ましてや、生きることの価値を見出せなくなってしまう。

でも、それが言えない。言葉が出ない。「良いことは絶対ある」と答えると、嘘とまでは言わなくても、なんか自分の言ったことに責任を感じるし、大きなごまかしをしてしまいそうで怖い……。

俺達は、来た道を戻るように歩いた。仕事帰りの会社員の群れを縫って進み、さっきとは打って変わって賑やかになっている最寄り駅付近にやって来た。

「ここだよ」

俺は、オフィスビルに隣接する高級レストランに指をさした。

「えっ……」

美雪は啞然と店の周りを見渡す。

「さあ、入ろうか」

「ちよっ、ちよっと健児さん！　いくらなんでも、こんな高そうな
ところは……ちよっ」と

「いいから、いいから」

俺は半ば強引に美雪の手を掴んで、扉を開けた。この辺の地域ではけっこう有名なフランス料理屋で、本場のフランスで修行したシ

エフによる魚料理と肉料理が絶品という評判がある。実はさつき、美雪がトイレに行っている間に、密かに予約を入れていたのだ。

店の内装は豪華というよりも落ち着いた雰囲気だ。店内にはBGMが流れ、どこからか食欲をそそる香りが漂ってくる。案内係に誘導されて席に着く。テーブルの上に、品のいいグラスに純白のナプキン、そして銀色のナイフやフォーク、スプーンなどが美しく並べられている。やがて、店の人によるフルコースの内容説明が終わると、ソムリエがワインの注文を取りにきた。俺は今、十九歳で未成年だけれど、バレなきゃ大丈夫だ。

「おすすめのワインを教えてくださいませんか？ あと、この子には何かジュースをお願いします」

美雪は終始緊張した面持ちでずっと下を向いていた。しばらくして、ソムリエに勧めてもらったワインとオレンジジュースらしきものと、料理が運ばれてきた。まずは前菜だ。純白のナプキンを膝にかけ、ナイフとフォークを手取る。だいぶ前にテレビでやっていた高級レストランでのマナーに関する番組をたまたま見ていたこともあり、こういう作法は、まあバッチリである。

一口食べる。うん、美味しい！ さすが高級レストランだ！ 普段はコンビニ弁当やカップラーメンばかり食っている俺でさえ、はつきりとわかる本物の味。シェフのフランス修行は、だてではなかったらしい。

美雪は、手を震わせながら、慣れない手つきで、しかも申し訳なさそうに食べている。

「そんなに遠慮しなくていいから。金はちゃんとあるし」

ウソ。あることはあるんだけど、今は親の仕送りと残っているバイトの金だけで生活している俺にとってはかなり痛い赤字だ。でも、彼女を喜ばせてあげたい気持ちで勝って、また、俺が一度行ってみたかったレストランだったというのも起因して、今に至る。今月は、好きなアーティストの新しいアルバムなどが続々発売されるが、それらを買うのを我慢すればなんとかなるだろう。

「ところで、こういったお店は初めて？」

家計のことは忘れて、なんとか平静を装う俺。

「……は、はい」

どうやら初めてらしい。それが何だか嬉しかった。次第に、美雪の顔もほころび、次々と料理を口に運んでいく。よかった、よかった、満足してもらえて。俺も一安心だ。

そんなこんなでコースは進み、次はいよいよ魚料理だ。それは魚を一匹まるごと調理したもので、特製のソースがたっぷりとかけられていた。上品な見た目と、濃厚な香りが実に食欲をそそる。「美味しそう」という言葉が顔に現れている美雪の笑顔も、さらに五割増といったところだ。

俺はマナー番組を思い出して、片側を食べた後は、ナイフとフォークで中骨を取り除いた。しかし、美雪は片側を食べたあと、裏返してもう片側を食べようとしていたので、ストップさせる。

「違う、違う。俺のを見て」

美雪は赤面して、俺の食べ方を見まねした。何だか先生になったみたいで、少し良い気分になってしまった。

次にテーブルに並べられたのは肉料理。皿に盛り付けられたステーキから良い匂いが立ちのぼってくる。さつそく食べる。肉にフォークを刺し込んで固定させ、人差し指でナイフの柄を押さえるようにして刃をすべらせた。左端の最初の一口分を切り分け、そのままフォークを口へ運ぶ。美味しい！ これもまた絶品だ！俺は念のため、肉料理を食している周囲の人の様子を窺う。よし、間違っていない。美雪も俺のを見ながら、食べている。

肉料理の後にデザート、そして食後のコーヒーと続いて、コースは終了。満足感に浸りながら、俺は支払いを済ませた。

「美味しかったな」

レストランを出てから、何気なく声をかけた。

「は、はい。でも……やはり、何だか申し訳なくって」

「いって。気にしなくて」

今月の赤字は痛いけれど、食べていたときの美雪の素敵な笑顔を見られたんだから、まあ、よしとしよう。

辺りはすっかり暗くなり、繁華街ではヤンキー風の若者達が多くなってきた。俺達はそんなのに気にせず、街を一気に抜けて、人気がない細い道を歩いた。

そういえば、美雪は受験生だったな。俺なんて中学生のときは、受験の年でも友達といろんなところ行ったり、ゲームとかばっかりして勉強なんて全然やってなかったからな。それでも、なんとか高校は受かったしよかったんだけど。

ほんとに昔はいろんな友達といろんなことをした。タバコも吸った。酒も飲んだ。万引きもした。高校のときは、校則で禁止されていたバイクの運転免許を密かに取って友達とツーリングもしたし、これもまた校則で禁止になっていたアルバイトもしていた。当時付き合っていた彼女と興味本位でセックスも経験した。

不良　と当てはまるかどうかはわからないけど、好奇心旺盛だった俺は、やりたいことはやり遂げようという意欲は常にあった。

しかし、今は何よこの状態。大学の授業が終われば、そのままいるんな場所へ遊びに行かずに、すぐ家に帰ってゲームをばかり……すっかり、俺の好奇心は衰えてしまった。

孤独　これが俺をどのように仕向ける。日本から遠い国に行くのならわかるけど、たかが関東から関西に行っただけでこんなに状況って変わるもんなの？

友達もできずに、遊びに対して何もする気がなくなった今、勉強だけが俺を楽しませてくれる。やはり入りたかった大学だけに、今までの学校での授業よりも、より数倍おもしろい。

勉強をがんばって、有名な大企業に入ればそれでいいじゃないか。

勉強をがんばって、資格をたくさん取ればいいじゃないか。

いい成績で、大学卒業。これでいいじゃん。

めでたくないって？ 友達作りはどうしたんだよって？

そりゃ友達欲しいよ。友達たくさんできたら、大学生活にこれ以上何を求めればいいのかっていうほど必要ではあるよ。

「努力すれば報われる」 が頭に浮かんできた。

そうだ、そうだよな。あきらめなければ、必ずいつかはできるよな。よし、もつと努力して自分からでも話しかけるようにがんばってみよう。何もしなければ、いつまでたってもいいことなんて起こらない。がんばればいいことがあると信じたい。

今なら、今なら言えるぞ。

「なあ、美雪」

「はい？」

「俺、実は大学に入って半年が経つっていうのに、まだ友達が一人もできないんだ」

「えっ……そうなんですか」

驚きのあまり目を見開く。

「でも、俺がんばる。いつかできるって信じて、がんばるよ。だから、美雪も、がんばろうよ」

なんでだろ、急に感情が込み上げてきて、泣きそうになった。

「まだまだ人生これからだから、たくさん幸せなことがあると思うんだよ。いや、絶対にある」

たとえば俺の言ったことが嘘になってしまったとしても、いい。ただ、とにかく美雪には元気に生きてもらいたい、という気持ちでいっぱいだった。

「みんなも、誰もがそう思って生きてんだからさあ、まだ中学生なんだから、そんなに悲観的になんかな、な？」

「あ……はあ」

曖昧な返事だった。美雪の両肩がすぼまる。

「ん、ああ、ごめん。突然、こんなこと言って」

「いえ、別に……」

美雪はひどく動揺していた。俺は持て余した。

伝えたいことは伝えた。あとは、美雪自身の問題だ。

昨日行った銭湯が見えてきた。アパートまであと少しだ。

「なあ」続いて沈黙を打ち消すように言った。「お腹いっぱい？」

「えっ……は、はい。満足です」

「でも、昼飯はそんなに食べてなかっただろ？ ほんとに足りてる？」

「いえ、ほんまにお腹いっぱいですよ」

「遠慮しなくていいよ」

「ほんまに、大丈夫ですから」

うつむきながら言う。

「俺は今、美雪を助けてる立場なんだから。とりあえずお菓子でも買うか？ そこ、曲がったところにコンビ二あるから」

「いいですって……」

昨日行った銭湯を通り過ぎる。今夜も人の出入りは少ない。

美雪は、ただじつと下を向いていた。恐縮しきった様子だ。

「金なんて心配ねえって。親の仕送りがあるし、それにやばくなってきたら、短期のバイトでも見つけて、それで稼げばいい」

俺の顔を窺うようにこつちを向いてくれた。

「そうからには、もっと俺に甘えないとお」

美雪の表情が和らいだ。

「そう、ですよ。助けてもらってるんですもん、ね。ほんますいません。お礼はきつと、きつといつかしますから」

「だからあ、お礼なんていらなくて。俺が助けてあげたいんだから。それよりも、今後のことを考えていかなきゃ」

「……ですよ」

コンビ二の前に来た。

「入ろうか」

美雪もびたつとついてきて、遠慮なく欲しいお菓子を俺の持つ力

ぬくもりあれば

ゴに入れた。チョコとグミと、そして肉まんを頼む。やはり、足りなかつたんだな。

アパートに続く道を歩いているとき、嬉しそうに肉まんを頼張る美雪を見て、いつまでもこんな時間がずっと続けばいいのにな。う気持ちだが、俺の胸にじわりと広がった。

第四話

次の日。

講義が終わり、飯を食うために食堂へ行つた。

美雪は俺の家でお留守番。もちろん美雪だけを家に残しておくのは心配なのだけれど、大丈夫です、と意気込みを見せつけられると信じるしかない。俺のことを信頼してくれているように。いずれにせよ、あとで昼飯を届けないといけないので、美雪の様子を見に帰るつもりだ。

食堂に入ると、ずらーと列を作っていた。昼休みになると、急激に人数が増える。俺はトレイを取って、今日は何にしようか考えた。日替わり定職にしようとしたが、昨日と同じ献立に気づいて、俺の順番が来たときはおばちゃんにカレーライスと言った。福神漬は入れないで、と付け加えて。

席はほぼ満席状態だった。友達同士やカップル、サークル仲間といったグループでほとんど埋め尽くされている。最初の頃は一人で食べていると、自分だけ違う世界、数百人のお相撲さんに取り囲まれたような所に座っている感じだったのだが、直に慣れてきた。周りを、お相撲さんではなく、貧弱なぺんぺん草と思えば、少しは気が楽になった。

ちようど入り口に近いほうの席が二つ空いているのを見つけ、駆け寄つた。しかし、反対側から来た女二人に取られてしまいそうだ。

負けるか。俺はすばやくテーブルに滑らすようにトレイを置いて、なんとか居場所ゲット。

女二人は「やだあ」と嘆いて、向こうのほうに行ってしまった。まだ俺の横が一つ空いているのに……って二人じゃ無理だよな。そうだよ、そうだよ、おまえらなんて誰かがいないと一人では何もできない奴らなんだよ。特に女なんて、トイレに行くのに誰かと一緒

じゃなきゃダメな奴ってけっこういそうだ。だから、孤独には滅法弱いはずだ。俺のほうが断然強い。それだけで嬉しい。

今の女、俺を睨んでたよな……。さすがに孤立しているだけあって、敵を作るのはやばいよなあ。誰も助けてくれないし。退学にまで精神的に追い込まれるのはご免だ。まあ、そんな心配はいらないと思うけど、これからは気をつけよう。うん。

さあ、カレーを食べよう。周りは気にせず、下を向きながら……。

「おい、健児」

不意に肩を叩かれ、どきりとした。咄嗟に横を振り向くと、「よお」と福田君があいさつしてきた。

「な、何でいるの？ それより、けんじい、っていつからそう呼べる立場になったんだよ。」

「おお、カレーやん。美味しいやんな、カレー。このどろっとしていて、辛いのがなあ、ん、やっぱりカレーってウマイよな」

「やっぱりこいつと関係を持つのは困難極まる。どんなにがんばってもこいつの世界には入っていけない。」

福田君のその周りには、彼のサークル仲間とおぼしき連中が数人。「こいつら、俺と同じ軽音楽部の奴ら」と福田君が言ったので、とりあえず俺は軽い会釈をした。スマモト君も交じっていた。

「とんでもない席に座っちゃったなあ……。」

「まー、ちよつど良かったわ。じゃあさっそく」

福田君は、ちよつとコイツに話があるから、と言って俺のほうを向いてきた。ああ、そういえば先日の話の続きだっけ。はあー、ほんとうでもいいんだけど。

例の続きが始まった。要するに、そのデートの成功で、カップル成立となったということ。俺はそれを適当に聞き流しながら、カレーを食べた。甘い、甘すぎる！ ここのカレーの味はなかなかの絶品なんだけれど、辛さが足りないのが残念だ。おばちゃん、いいかげんに辛さを上げてよ、あとビーフをもう少し足してよ、おばちゃん

ん。

やっと福田君の話が全部終わった。かのように見えた。

「健児はどうせ彼女おらへんのやる？ この話を参考に女を落としてみたら？」

この言葉で、堪忍袋がプチッと切れ、怒りが全身に込み上げてきた。

なんだと、てめえ。せっかく価値のないどうでもいい話を聞いてやったというのに、その言い方はなんだ。俺だって本当は少し羨ましかったんだけど、自慢げにえらそうに言うことはねえだろ？ それになんだ、「けんじい」って。友達でもないのにそんな呼び方すんじゃねえよ。お前と少しでも仲良く接していこうと決めた俺が馬鹿だった。一緒にいたらすんげえムカつくような奴と誰が友達になるか、コノヤロー！

俺は食べかけのカレーを一気に平らげ、福田君に振り向いた。

「俺だって、彼女ぐらいはいる」

「えっ？マジで？」

予想外の言葉に、福田君は目を丸くした。

「ああ」

彼女と呼べるのかはわからないけれど、美雪がいるじゃないか。

「そうなんか……」

煮え切らない様子で応えると、福田君は俺の顔を覗くように見つめてくる。

「あー、なるほどねえ。やっぱりそうなんか。まっ、ええわ」

福田君は意味ありげな笑みを浮かべると、そっぽ向いて他の連中と雑談を始めた。

突然、胸がきゅーっと締めつけられるような息苦しい気分になった。俺がやけになったせいで、勝手に俺の彼女ということになってしまった美雪に申し訳なくなってきた。自責の念に駆られた。

「ねえ、なんか盛り上がりすぎてみたいやけど、どおしたん？」

トレイを持った一人の女がこっちのほうにやってきた。見たこと

もない女だ。軽音楽部の奴か、それとも誰かの彼女か……と考えているうちに、空いていた俺の横の席に腰をかけた。って、あんたもカレーかよ！

「この彼は、いったい誰なん？」

「ああ、俺の友達やねん」

いつからお前の友達になったんだよ。

「へえー」

俺に微笑みを向けてくるので、視線を合わさずにカレーを食べ続けた。

それはそうと、キョートさをアピールしたいのか、ミニスカートとロングブーツに、フード付きのコートの隙間から見えるピンクのカーディガンと、男たちの関心を集めようという意志が見え見えの意匠を凝らした装い。ぶつちやけ、ぶりっこだ。俺は、男に媚びる女は大嫌いだ。この女、おそらく女友達があまりいないほうだろう。ほとんどが男友達で、ほとんど男友達と一緒にいそうな感じがする。ドラえもんに出てくるしずかちゃんのように。

「あの〜」甘ったるい声が耳の中に入ってきた。「お名前は？」

鳥肌が立った。俺は向かずに「前原です」と小声で答えた。

「ふーん、そうなんやあ。ちなみにあたしはねえ、斎藤花江っていうの。呼ぶときは花江でええしね」

聞いてない。聞いてない。

「ここいるメンバーって、みんな同じ軽音楽部なんやけど、女ってあたしだけなんよ。なんでなんやろねえ」

知らない。知らない。

「でも、バンドもみんなええ人やし、自分のやりたい音楽ができるから十分満足やけどね」

どうでもいい。どうでもいい。

「それにしても、こうやって出会うのもなんかの縁やんなあ。これからもよろしくね、前原君」

「……あ、う、うん」食事を中断して、俺は花江のほうに顔を向け

た。やっとこっちを見てくれたのかというようにニコッと愛想笑いました。

「あのさあ」

「ん？ なあに？」何かを求めている瞳。

「カレー冷めちゃうよ」

一瞬呆気に取られた花江は、何も言わずに引きつった顔でカレーを食べ始めた。その間に、俺はそそくさと食堂を後にした。

弁当屋でヒレかつ弁当を買ってからアパートに戻り、部屋に入ると、美雪はテレビゲームに熱中している最中だった。服装は、制服に着替えていた。とりあえず、無事だったことに一安心した。

美雪が今やっているゲームは、格闘系ではあるが、指定されたステージで相手を攻撃してふつとばし、場外から落つことすのが目的の至ってシンプルなゲームなので、初心者でも十分に楽しめる。戦いが始まったら、いろんなワザを駆使して、とにかく相手を攻撃する。そうすると、画面の下に表示されている相手のダメージ%が溜まっていくので、ある程度溜まったところで、強力な攻撃で相手をステージの外にふっ飛ばしていく。

俺が学校に行っている間は暇だろうから、一応ゲームができるようにテレビに接続しておいたのだが、まさか本当にはまっちゃってるなんて。この子にはゲームなんかよりも、読書している姿が一番似合っていると思うんだけど。

俺に気づいて、テレビに凝視しながら「お帰りなさい」

「なんだかなあ……まあ、いいけど。ところで、ゲームと違って持つてんの？」

「いえ、友達の家で少しやったことがあるぐらいで」

そりゃそうだろうな。特にこの子には、ゲームはちよつとなあ……。

「にしても、はまってますねえ。確かにそのゲームはおもしろいけどさあ」

「いっぱいあったソフトの中から選んだのが、たまたまこのゲームで……」

プレイに集中だ。

「弁当買ってきたから、冷めないうちに召し上がって」

美雪はコントローラーのスタートボタンを押して一旦ゲームを中断してから、

「ほんまにありがとうございます」とこたつに座った。「ゲームってあんなにおもしろいなんて、びっくりしました」弁当のカバーを開ける。

「う、うん、そうだよな」少し考えてから、思いきって言った。「ゲームすんのはいいけど、でもなあ、自分、受験だしなあ……んー、やっぱさあ、逃げてたってどうしようもないじゃん。だから、やっぱ努力をして生きていかない……勉強がんばって志望校に受かる。美雪ならできるよ」

美雪は吐息を漏らした。

「逃げてはいけないのは、わかってます」やるせない口調で、「でも、今の自分はそれしか行動できないんです。ほんま、どおしようもないですよな」

沈鬱な顔を浮かべながら包みから箸を取り出す。

「なんか、ゲームやってると、自由だって感じがして……友達と喋っているときとか、静かな場所で本を読んでいるときとかも、そういう雰囲気で、すっごく落ち着けるんで……」

お互いしばらく黙り込んだ。

「そういう心の拠り所があるってことは大事だと思うよ。俺も、学びたいことを励んでいるときが今は一番楽しいもん」

「はあ……そう、ですよ。それがないと生きていけませんもんね」

さっきからずっとうつむいている。

もう何も言わないほうがいいかな……。

「あ、俺そろそろ授業始まるからまた行かないと」すっと立ち上が

つて、「できるだけ早く帰ってくるようにするから、ゲームでもして心を落ち着かせて、ね？」

顔を上げた。コクリと首を動かした。

その何とも言えない表情を見て、無性に逃げ出したくなって、後ろも顧みず外に出た。

人を縫うように走る。ちらつと仰いで、曇り空に向かって笑いかけた。また前を向く。ふと咲き乱れたラベンダーの光景が脳裏に浮かんだ。そんな幻想的な世界に体が吸い込まれそうだ。紫の絨毯に包まれながら、椅子に座り、本を手に、まったりとコーヒーを飲む。小鳥のさえずりも聞こえてくる。うーん、すばらしい。そして、木もれ日が漏れる静かで優雅な高原に降り立ったひとりの白い妖精。やさしくて愛らしい微笑みに、思わず心ときめいてしまう。殺されたり、死んだりすることもなく、戦争、宗教もない、自由に、いつまでも平和に、そんなユートピアな所に今すぐ行ってみたい。ああ、虚しくなってきた。人間はどうして、こう臆病なんだろうか？ 何か困難に直面したら、すぐ現実から離れ、なんとか満たされようと必死にもがく。それからは、その現実には警戒心を持ち、よけいな神経を使うようになり、どんどん素直になれないようになっていく。そのため、誰かの支えがないと生きていけなくなる。あの子にとつて、今は俺が支えなのか。俺が……だよな。ああ、やっぱり俺しか彼女を助けることはできないんだ。クソッ、何で逃げるんだ。さっきの、あの美雪の悲しそうな顔。ゴメン、俺が帰ってくるまで待っててくれ。必ず助ける。こんな、こんな俺を信頼してくれてるんだ。やってやる。決めたじゃないか最初に。美雪を救ってやるって。ああ、なんか急に清々しくなってきた。走れ、健児。俺のことを思ってくれている人がいるんだ。期待に答えてやれ、健児。人生まだまだだよ。どんな困難でも、かかってこい。乗り切ってやる。どこまでも、どこまでも走れ。車がなんだ、走って抜いてやる。ああ、きもちィー。なんか、今はただ、もっと美雪と一緒にいたいって思う

自分がいる。美雪を助きたい、そして早く家に帰ってあげたいんだけど、できれば、本当はまだずっとあいつと仲良く喋っていたいって思う自分がいる。いや、そんなこと考えちゃダメだ。いかん、いかん。その本心を打ち消そうともがいても、なぜかすっかりとは消えてくれない。ああ、最低な奴だな、俺って。いつたい、これからどうしたらいいんだ。どこに向かっていけばいいんだ。じれったい気持ちを振り払うように、ペダルを漕ぐスピードをどんどん上げていった。

今日最後の講義が終わり、急いで帰ろうと校門に向かった。
ポンツ！

突然誰かが俺の肩を触ったので、一瞬鼓動が速まった。振り向くと、福田君だった。

よりによつてコイツと鉢合わせだなんて。ついてねえ！

「おお、ちょうど良かったわ。これからみんなで飲みに行くんやけど、お前も来あーへん？」

「えっ、俺も？」

「そう」

何でこんな奴らと行かなければならないんだ。よし、断ろう。そのとき、スマモト君がこっちにやって来た。

「今、健児も誘ってるよこやねん」

そしてスマモト君も「前原君も行こうや」と言う。

ほかの連中も続々とこっちにやって来て、口々に「行こうや」と言う。花江も俺の肩をいきなり掴んで、「行きましようよ」と言う。

周りの威圧的な感じになぜか焦ってしまい、思わず「いいよ」と口に出してしまった。すると、みんなは大盛り上がり。しまったと思っても、もう遅かった。

ま、落ち込んでいても仕方ない。どっちにしろ一旦アパートに戻らないと。

「じゃあ、俺は一回帰ってからまた来るよ」

「はあ？ 何言つてんねん。もう行くでえ」

「いや、この荷物置いていこうと……」

「別に、それぐらいやったら持つてつても大丈夫やん」

「そりゃ、そうだ。でも、美雪に伝えないと……」

「じゃあ、ここで待つといて。あと一人呼んでくるから」と福田君達は経済学部校舎に戻っていった。

その間に、美雪に電話しようにも、他の人にバレないように念のため家にかかってくる電話には出ないように言っている。携帯にかけようにも、持っていないんだからどうしようもない。あの子の夕飯どうしよう。連絡しようにもできない。クソッ！

このまま逃げちゃおうか。福田君には悪いけど、逃げさせて頂きます。

人込みで少なくなった校門付近の通路に入った。

「おいおい、どこに行くねん」

福田君が一人でこっちに来て来た。

「やっぱり逃げられないのね。今日はとことんついてねえー」

「行くぞ」

観念した俺は福田君の横につき、集団の中に混じった。

こじんまりした居酒屋だった。

さつき誰かが予約をしたのか、予約席と書かれた紙が貼ってある襖を開けると、ちょうど十人ぐらいが座れるスペースの小部屋だった。

俺は真っ先に出口から手前の席に座り、他の奴等もぞろぞろと座り出す。なぜか花江は俺の横。別にいいけど……。

飯のほうはおまかせということで、飲み物を選ぶためメニューを見た。周りの奴等はみんな酒類。店員のおねえちゃんに、生中だのレモンハイだの、はたまた焼酎だのと叫ぶ。福田君はビール。みんな、大学一年生ってことはまだ十八か十九歳でしょ？ 一応未成年

なんだから飲酒はダメだということを実感しないと……って言った
って無駄だよな。そんな俺も、昨日はワインを飲んでたし。

まあ、いい。もう、やけた。今日はいっぱい飲んでやる。

「とりあえず、生中」と俺。

「じゃあ、あたしはチューハイのピーチを」と花江。

「俺は、うーん、コーラで」とスマモト君。かなりの酒豪に見える
のに、お子ちゃまのような一面に驚くのと同時に、この中では一番
まともな人間に見えてしまう。

食事も揃い、飲み物もみんなの手元に来たところでさっそく、「
乾杯！」

周りの奴等に、コーンコーンと瓶をはじき合ってから、飲む。う
ーん、やはり冷たい生ビールは上手い！

やっぱり居酒屋ときたら、焼き鳥でしょ。俺は、きも・ずり・ここ
ろ（鳥の心臓らしい）・もも・つくねを食べながら、酒でぐくぐく。
一杯目を飲み終わると、早々と酔いがきてしまった。

さっきまで俺は、ずっと家で待っている、お腹を空かせて待つて
いるだろう美雪のことが心配で心配で、どうしようかと悩んでいた
のだけれど、ほろ酔いになってくると、何だかもうどうでもいい気
分になってきた。生中、三杯目に突入。

花江はテーブルに肘をついて髪を手でとかすようにいじくりなが
ら、気だるそうに俺に喋ってくる。男どもにとっては、その姿に色
気を感じて惹かれてしまうだろうが、俺にはそんなオーラも感じな
いんですが。それよりも、料理がおいしいこと。ナスの炒めものに、
季節にぴったしのキムチ鍋。辛いけど、いける。

「最近始めたばかりのバイトやめちゃったって聞いたけど、ほんと
？」

向かい側に座っているスマモト君に何気なく訊いた。

「そーなのよ。ついこないださあ、そのバイトで遅刻しちゃったん
だよ。そしたら、それだけで月給が下がっちゃってよあ。たった二
分遅れただけなのに、ひどくねえ？」

「あー、それは痛いなあ」

「だろ。それで嫌になつてやめたつてわけ。次も探してるんだけどさあ、なかなかいいところがなくて……」

「あたしの働いてるとこは結構いいよ。遅刻してもちよつとぐらいなら許してくれるし、なんたつて時給も高いしね。何よりも、他の店員さんたちが優しく接してくれるの」

花江が、俺たちの話に横槍を入れてきた。いや、お前には聞いてないから。しかも、その店員たちつてほとんど男だろ？ お前のような奴なら、男にはウケるだろうな。かわいいそぶりを見ると、ほつとけなくなるつてことか。女には逆に、厳しくされてそうだな。

美雪のこともすっかり忘れて、俺は腹を満たしていった。今度は、カクテルを頼んでいく。

三人で盛り上がつてるところ、一番奥の席にいた福田君がこつちに寄つてきて、声をかけてきた。

「なあ、昨日お前、誰かと駅前まで歩いてるとこ見たんやけど、あれが彼女なん？」

胸が高鳴り、こめかみがひやりとした。テーブルの上にある食べかけの大根サラダに目を逃がした。首をかしげながら考え込み、そのとき、ハツと美雪のことも思い出すと、急に居たたまれなくなつて、しまいには自己嫌悪に陥つてしまった。

「しかもあの子、だいぶ若そうに見えたけど」

「マジ？」

「えっ、そうなん？」

スマモト君と花江が話にくつついてくる。

「なあ、どおなんだよ？」

しつこく問いただしてくる福田君。

「いや……あ、あれは、実は……」

「実は、何？」

顔を寄せてくる福田君。

「俺の妹なんだ」

「はあ？」あざ笑うかのような仕草を見せ、「妹やってえ」とスマモト君と花江に顔を向ける。

「ちなみに、妹って何歳？」

スマモト君が聞いてくる。

「……高校生だけだ」

「でもさあ、昨日って平日じゃなか。学校ってあるんじゃないの？」

さらに突っ込んでくる。

「き、昨日は、たまたま開校記念日で休みだったんだよ」

「おいおい、たった一日のために、ここまで来んのかよ？」

見下すように言う福田君に、少しイラツとした。

「ああ。どうしてもこっちに遊びに来たいって聞かないからさあ、しょうがないだろ」

福田君はまだ納得しきれない顔をしていたが、「ところで、お前の彼女ってどんな感じなん？」とすぐに話題を変えた。

「ま、まあ、とてもやさしい子だよ」

「それだけじゃ、わからへんよ」

「じゃあ、お前の彼女は、どうなんだよ」

はぐらかすと、福田君は自分の携帯を開けて、彼女と一緒に写った写真を俺に見せてくれた。

俺は特にコメントもなく、福田君に携帯を返した。髪は染めていて、ピアスもして、いかにも化粧ぬりたくりの女だった。こういう女は嫌いだ。

「俺、そろそろ帰る」と財布から出した三千円を、横にいた会計係でもある福田君に渡し、逃げるように立ち去ろうとした。

まだ早いやん、という声が部屋中に響く。

福田君が「そっかあ。残念やなあ」とニヤリ。「じゃあ、これができるら帰らせたるわ」

「どついうことだよ」

福田君はビール瓶を持って、「これを十秒以内に一気に飲み」

コイツも酔ってるんだろつか。目がとろんとしている。

すると、周りから「イツキ、イツキ」と掛け声を浴びせられる。

お前ら、みんな酔ってるのか。俺もそうだけど……。

さあ早く、と福田君が急かす。

クソ！俺は早く帰らないとダメなんだ。美雪が待ってるんだ。

「よっしゃ！」と俺はビール瓶を持ち、一気に飲んだ。みんなが十秒を数える。

一、二、三……ヤケクソじゃー！ 四、五……き、きつい、六、

七、八……まだ半分しか減ってないじゃないか。さっきの酔いもあって、体が熱くて苦しい。九、十……無理じゃー、クソ！

「はい、終わり。残念！」と誰かが言ったと同時に、一瞬、目に映る光景の厚みが消えていくような感じがして、飲みかけのビール瓶をテーブルに置いたときには足のふらつきが増し、そのまま床に倒れこんでしまった。

最終話

ガチャッ……ん？

何かが当たった音がして目を覚ました。ざらついた男の声が聞こえてくる。

ふと体を起こすと、誰か二人が俺の目の前で喋っていた。視界がぼやけていて、誰がいるのかわからない。うっ、頭痛え……。

起き上がる気配を感じたのだろう、「おお、目が覚めたか」と聞き覚えのある声があった。目を細めてよく見ると、福田君だった。ぼやけが取れていくにつれ、一瞬ぞつと寒気がした。もう一人は、俺を見るなり表情を曇らせる。

「……なんで、お前がここに？」

「おいおい、俺は態々寝込んでるお前を、タクシー使ってここまで送ってやったんやで。感謝せえよ」

福田君は笑いながら言った。そういえば前に、俺が住んでるアパートの場所を何気なく教えたことがあったなあ、クソッ！

ああ、まだ意識がぼーつとしている。気分も悪いし、最悪……

「っていつか、お前のせいで、こんなことになったんだろ」

「ああ、あれはごめんやって。冗談だったんだよ」

「冗談にも程があるよ、と睨みつける。」

「まあまあ、水でも飲みいーや」

こたつの上に置いてあったコップを口に含む。少し気分がマシになった。

「あつ、自転車は……」

「また明日にでも店に行つて取りに行けばええやん。それよりも、はよ寝たほうがええんちゃうん？ オレもそろそろ帰るし」

「ちよつと待って」

帰ろうとする福田君を呼び止める。

「なあ、その子と何喋ってた？」

俺は福田君の横にいる美雪に指を指した。

「えっ、あ、ああ、まあいろいろと」「慌てたように言う福田君も、すぐににやけた顔をして、「にしても、昨日一緒にいた子がこの子だったってな。こいつ、さっき妹が遊びに来てたなんて嘘ついてたんやで」

薄笑いを浮かべている福田君をよそに、美雪はわなわな震えている。

「しかも、彼女じゃなくて、家出をかくまってたっていうし」

俺は、身の毛がよだつのを感じながら、立ち上がって美雪に近づいた。美雪は、顔を背ける。

「なあ、全部こいつに話したのか？」

美雪は何も答えない。

「家出のことも」

美雪はぴくりともしない。

「おいおい、別にそんなやばいことじゃないやろ？俺はちゃんと黙ってお……」

「なあ、聞いてんだよ。どうなんだ？」

俺は福田君の言葉を遮る。

美雪は軽く頭を縦に動かした。どうやら家出のことも話したらしい。

「ところで、ここにどうやって入ってきた？」

俺は福田君に視線を移す。

「えっ、いや、お前を背負いながらドアを開けようとしたとき、そういう鍵どうしようかと迷って、試しにドアノブ回したら開いたんで、ラッキーと思って入ったんやけど」

俺が外に出るときは、内側から鍵をかけるように念を押して言い聞かせていたのに、どうやらかけ忘れたらしい。

全てが台無し。せっかく掲げていた俺の目標も、それに向けて努力してきた俺の目的も、これにて、達成せずに終わってしまったんだ。二人だけの秘密だったんだから、誰かにバレちゃそれでおしま

いだ。俺は美雪に元気になつてもらつたために、不器用ながらもいろいろなこととして、そして少しずつ、憧れの良い関係を築き上げていたというのに……。もう、この部屋は二人だけの塔じゃない。それがあつけなく崩れていくのを感じていると、何もかも失つてしまったように悲しくなつてきて、切なくなつてきて、悔しくなつてきて、この思いを誰に晴らすべきかもわからないまま、異常的な憎しみが感情となつてこみ上げてきた。

「なあ、忘れたのかよ……俺が家にいないときはちゃんと鍵しめて、誰にも中に入らせないようにしろつて……家出中なんだから、誰にも内緒つて約束したんじゃないのかよ……それ、なのに……」
怒りで顔がひきつつて、声が波打つように揺れる。

「おいおい、この子はなんも悪くないやろ。つてか、そもそも、家出なんて結局ばれるもんやでえ。お前もそんなこと言つてんと、早くその子を説得して家に連れて帰つてあげへんと、両親が心配してんぞ」

「嫌です！」

福田君の言葉に、美雪はうつむきながら強い語気で言った。

「さつきもオレ、実は説得してたんやけど、どうしても帰りたくないんやつて。このままじゃ、マジやばいよなあ……」

どうしようかと俺を見つめてくる。震える拳を握り締めた。

「ごめんなさい。でも、ほんまに帰りたくないんです。も少しだけ、ここにいさせてください。どうか、お願いします」

頭を下げて、必死に懇願してくる。頭がかーつと熱くなつてきた。

「なあ、ええ加減、何があつたのかお兄ちゃんに詳しく教えてよ」

福田君が美雪にささやいているところで、一瞬思考が停止した。美雪が何も言わずに号泣しだすと、いきなり頭の奥で火花がバチバチと散つた。持つて行き場のない感情が、俺の体の中ではじけ続ける。

怒りよりも、むしろ悲しみのほうが強い。強いというより、深い。

「出て行け！」

声を絞り出すように言うと、目から涙も出てきた。

涙に濡れた目を手の甲でこすって、「帰れ」と言った。福田君は、目を丸くして気まずい状況に何も言えないでいる。身動きしない美雪に、もう一度、「さっさと出て行け！」と怒鳴りつけた。

玄関のドアを閉める音が聞こえると、俺はその場に膝からくずおれた。美雪は嗚咽をこらえながらそのまま自分のカバンを持って、うつむいた顔を上げることなく出て行った。これからどこへ行くんだろうか、もう、そんなことはどうでもいい。

床にへたりこんでいると、福田君はおもむろに腰を下ろした。

「おい、いくら何でもあんな言い方はないやろ？　あまりにもかわいそうやで」

「……はつきり言っつて、迷惑だったんだよ。これで、せいせいしたよ」

「何ウソこいてんねん。お前が泊まらせてあげてたんは、あの子を助けたかったからとちゃうの？　ほな、なんでここでずっと泊めさせてあげてたんや？」

「うっせえよ。もう、頼むから一人にしてくれ」

「ああ、そうかいな。わかったわ。お前って、そおいう奴やったんや。都合が悪くなったら逃げるやなんて、一番最低な奴やな」

福田君は吐き捨てるように言い放つと、大きく足音を立てて、乱暴にドアを閉めて出て行った。

急に、部屋の中が肌寒くなった。情けなさや切なさやこみ上げてくると、再び俺に嘔吐感を与え、洗面所に行き、吐いて、吐いて、吐いて、また吐いて、気分が幾分スツと楽になってきたところで、寝た。

翌朝。

美雪は、いなかった。

荷物もなかった。制服も、鞆も、持ち物全ても、何もかも。

改めて、実感した。行っちゃったんだ。

やっと家に帰ってくれたんだ。俺の目的もこれで達成したんだ。

俺はまた寝転んだ。

良かった、これでほんとに良かった。

布団の中にもぐって、うずくまった。

何だか昨日の夜からずっと寒く感じる。

それよりも、心の中で引つかかっている得体の知れないものが気になって、気になってしょうがない。

涙が頬を伝っていくのがわかった。目を拭いても、幾度と無く出てきてしまう。どうしようもない、言い知れぬ思いで、俺は体を起こした。

そうだ、旅に出よう。

俺はどこに行く当てもなく、最寄り駅に向かった。どこにいるのかもわからないのに、ただもう一度だけ会えたらいいなあという奇妙な思いを浮かべながら、俺は電車に乗る。

窓を眺めた。砂利の間から顔を覗かせていた草を、走る列車が巻きおこした風で揺らす。緑の葉っぱを繁らす木々を右手に緩く弧を描いた。待ち人のいる踏みきりを、注意を喚起する電子音と共に通り過ぎてゆく。

まばらに大小の建物があつた。列車に平行して、中途半端に広い道路で走るいくつかの車をどんどん追い越していく。人工物の間を木々の緑の葉っぱがところどころに飛び出し景色には変化が生まれていて、まばらに土を見せる野原が続く。

列車を乗り換える。座席は、車両の長手方向とクロスする方向に

並んで着席する配置になっていた。

窓際に座り、しばらく居眠りしていると、俺の向かい側に一人の若そうな男が腰を下ろした。びくっとして目を覚めると、何駅か過ぎ去っていたようだ。見たことのない風景が広がる。

その男はというと、短めの黒髪、適度な長さの前髪は散らしているけど、ファッション雑誌に載るようなカッコいい髪型ではなかった。自然任せで適当にまとめたといった感じ。服装はトレーナーに下はデニムのズボン。特に着飾るつもりはないのか、茶色の革靴を履いた姿なのに、ここが家の中であつたとしても違和感がなかった。

男の膝の上に広げられていた雑誌には、事件の事が載っていた。

「人気女優 自殺の真相！」と、興味を引くように強調された見出しを見て、思わずぞっとし、急に気分が悪くなって、しばらく嫌な気持ちに苛まれた。

そういえば、授業のレポートのテーマが「マスコミについて」だったのを思い出し、参考になればと、俺は今抱いたことをメモ帳に書き記した。

最近のマスコミの報じ方には、疑問を感じる。どうやら、善か悪かの二元論で物事を判断する傾向があるようだ。先日、世間の人々に影響を与え、社会に大いに貢献した人が汚職問題で逮捕されたが、今までは打って変わってその人の人格を否定するような態度をとっている。しかも、事件には関係のないプライベートルなことまで報道している。正直、人々に不信感を抱かせるような一種の嫌がらせがマスコミの底流にあると思えてならない。このように、マスコミの独善的矛盾点をどんどん指摘する必要があると思う。誰も声を上げなければ泣き寝入りのままなのだから。また、マスコミの及ぼす影響がいかに大きいかということをもっと当人達が認識して、責任ある行動を取ってくれることを祈るばかりだ。事の重大性に気づいている人はどれくらいいるのやら……。

まばらにある建物が過ぎると、真っ青な空が見えてきた。白い雲

がアクセントをつけた空だった。再び緑の草葉が生い茂る地面が続けば、緑と青のコントラストが車窓を眺めるものの目に眩しく映る。快晴の空の下、清々しくもまぶしい白い光が、列車の中程、中間までをも明るく照らしている。

その男はというと、ずっと下を向き続けて、ゴシップ雑誌を読みふけている。けれど、それを読むのに没頭しているといった素振りには見えない。字面を追う目の動きは、大してせわしくもなく、一字一句しっかりかみ締めようとゆっくり動かすこともない。でも、やはり興味がないわけでもないらしい。時々ページは捲られていた。優しく雑誌に投げ掛けられた視線が男の気持ちを物語っているのかもしれない。どこか、デート待ちをしている風に見えないこともない。

突然、男が雑誌から顔を上げた。俺は一瞬だけ顔をそらす。また目を向けると、横の窓のほうに振り向いていた。

いつの間にか、一面の緑豊かな景色に移り変わっていた。

俺は、また列車を乗り換える。

ゴトゴトと列車の音に習って、つり革を持つ手が揺れた。人口密度が低い為か光の通りがよくて、座席の振動につられて揺られる人々もつり革と同じリズムを刻む。

窓の先、列車の先頭が縮んで見えるほうに駅の大きな影が見えてきた。そのすぐ横には青く広がる海が見える。降りたこともない駅だったけれど、なんとなく降りてしまった。

狭い構内。いかにも、田舎の駅って感じだった。時計を見ると、昼をとづくに過ぎている。かれこれ、三時間以上も電車に乗っていたことになる。

改札口を出てからしばらく歩くと、見慣れない海岸が目映る。風は涼しくて、砂浜を含めた海岸と町を区切る防波堤の上の景色が、俺の心をうきうきと掻き立ててくれた。

海岸に入り、砂浜を歩く。優しい波の音が心をさざめかせ、踏む

ときめ細かい砂が柔らかな感触を返す。心の中で立ちこめているわだかまりを払拭してくれるような清々しい気分にさせてくれる

ふと足を止めた。肩より長い黒髪をした女性が、手を後ろについで足を伸ばし、座って海を見つめている。それを見た俺は、まさかと思い、彼女のほうへ駆け寄った。

何をしているんだろう、どんな顔をしているんだろう、思わず女性の視線を遮るように前から覗き込んでしまった。やはり違った。女性と俺は驚いた表情を浮かべて見詰め合った。

「あ、あの、す、すみません……」

何となくタイミングを外してしまい遅れて俺が頭を下げると、「あ、別に」となんでもないような顔をした。

三十代前後ぐらいだろうか。地味なワンピース姿の女性は、マスカラもファンデーションも紅のリップも濃いめで、少し不自然にも感じる。顔がやつれているようにも見える。

お互いに会話もないまま見詰め合う。雰囲気確かめ合っているといった感じだ。

女性の視線は、再び海のほうへ向けられた。

「ところで、浜辺に何しにきたの？」

唐突の発言に、俺はワントテンポ遅れてしまった。

「ちよつと、ぼーつとしに」

「ぼーつとお？」

笑いを我慢しているように、顔を隠す。そんなにおかしいか。

「じゃあ、あなたは何を？」

俺は少し口調を強めた。

「まあ、いろいろあってね。気づいたらここにいたってこと」

「そ、そうなんですか」

俺も海を眺めた。きめ細かく綺麗な砂浜の先には、緩やかに盛り上がった波頭が見られる平穏な海。かもめが緩やかに空を舞って円を描いている。

何か気配を感じて顔を横に向けると、女性の視線が俺を捉えてい

た。

「あんだ、まだ学生だよな？」

「あ、はい」

「あたしね、一生つてのは高い塔みたいに思うの」

いきなり何言い出すのかと思いつつ、俺は彼女の横に腰を抱えて座り、話に耳を傾けた。

高く細長い塔の側面、そこにその塔の所有者がたつた一人くっついて、ゆっくりとゆっくりと登っていく、くっついていられなくなつて落ちてしまうとき、それは人の死を意味する、人は生物なので死にたくなんかないから、必死にくつつく、そしてくつついた以上は登つていくしかなくなる、つまりそれが一生の形である、と。

女性はにわかにな表情を曇らせて、「あたし、さっきまで本気で死のうかつて思つてた」

俺は目を丸くして、何も言葉が出せなかった。彼女のどこを見るともない瞳を見て、行ったこともない水底の静けさを感じた。

「で、ずっと考えてただけけど、自分で死ぬつてのは、その高い塔から自ら飛び降りるみたいなものだ。病気になるって、登るのに疲れてもいないのに、飛び降りてしまう。体はまだ元気なのに、嫌なことがあつて、それから逃げるように飛び降りてしまう。なんかそれがバカバカしく思えてきてね。あれだけのために死んじゃうつてバカみたい」

女性は一息に言つて、不意に「だからね」と声をひそめ、俺を見るみなぎしに力を込めた。

「どつちにしたつて、心、つまり中身が大切なんだから、外を引きちぎるなんてことをやってはいけないと思うの。外があつてこそ、人はあるんだから」

女性は一人で勝手に納得して、また顔を前に向けた。何を言っているのかいまいちよくわからなかったが、とりあえず「そうですよね」と適当に相槌をうつた。

「生きていて何も楽しいことなんかないなんて、やっぱありえない

もん。あたしにだって、大好きなお菓子やケーキがずっとそばにいてくれるんだから……そう、それでいいんだよね」

女性は体をこちらに向けると、ポンと俺の肩をつかんだ。なぜか怖くなって、体がぶるつと震えた。

「あんた、浜辺じゃあ、散策するほど色々なんじゃない？」

「あつ、いいのいいの、何にもなくなつてね。今日のような日で青い海があればそれでいいのよ」

女性は、ゆっくりと歩き出した。

「あ、あの、どこへ行くんですか？」

不安げな顔している俺に再度視線を向けた。

「大丈夫大丈夫。あんたも、ぼーっとする時間がなくなっちゃうしね」

「はあ……」

俺が頷くと、女性は満ち足りた活気のある歩きで駅のほうへと消えていった。

海をじつと眺めながら、ぼーっとする。本当に綺麗な海だ。不思議と体が癒される感じがする。

思った。人っていうのは、やっぱり一人じゃ生きていけない。誰かに頼って生きているんだと思う。もしも自分に厳しくて、毎日必死に生きてる人がいたとしたら、たとえその人と直接話をする機会があんまりなくても、やっぱりそういう人はとっても得がたいんだと思う。

しかし、誰であれ、頼りがいある人というのは、いずれは失うときだってある。失ったとたん、心は軽くなり、ごっそりとぬけた感じになり、腑抜けてしまい、最悪の場合は自分を壊しかねない。だけど、それがかえって毎日必死になって生きていこうとする勇氣と希望をも与えてくれるのかもしれない。いや、そうだとあつて欲しい。俺にとつても、あの子にとつても。

上を見上げた。大きな綿のような白い雲とその間に垣間見える青

ぬくもりあれば

い空が、その下に広がる海と相まって、穏やかで雄大な景色を感じさせる。

「さて、行こうか」

体を勢いよく起こしたときは、ダークな自分ではなく、ピュアな自分に入れ替わっていた。

終わり

最終話（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

『人生や将来の不安・決断』といったテーマを踏まえながら、描いてみたつもりです。

長文ではありますが、

- ・読みやすかったか
- ・上手くまとまっていたか
- ・良かったところ
- ・悪かったところ
- ・感じたこと

などなど何でも結構ですので、忌憚のないご意見やご感想を頂ければ、幸いに存じます。

よろしくお願い致します。

ぬくもりあれば

PDF小説ネット発足にあたって
インターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5778e/>

ぬくもりあれば

2008年8月13日21時54分発行